

活用形・付属語のアクセント

—東京方言と宮城県登米市方言を例に—

佐藤 奏

はじめに

本稿は、学校文法でいう“付属語”のアクセントの記述方法を提案するものである。

“付属語”（学校文法の用語法による場合は必ずこのように“ ”で括る）を「活用形」と「付属語」とに分ける。活用形については屋名池誠の述部の形態・アクセント記述を用いる。第1節で用語の定義をかねて概略的に示す。

第2節で付属語のアクセントの記述法について述べる。これは活用形とは独立の方法である。第1・2節の例示には東京方言を用いる。

第3節では宮城県登米市方言を具体例としてとりあげ、記述を試みる。この方言は一部の接辞と語尾および補助動詞が複雑なアクセントをとるので、それに関してやや詳しく述べる。第3節は前稿＝佐藤奏(2008.3)の続編という意味合いを併せ持つ。なお前稿から考えが変わった点があるので【補記1】【補記2】に述べた。

第4節では、“付属語”アクセントの記述方法について、本稿と関連づけながら先行研究を概観したのち、筆者の立場を明らかにする。主張は次の通りである： 付属語のアクセント記述は「アクセント単位」に着目することが必要である。そのことにより、当該方言の自立語アクセントとの一貫性、つまり一方のアクセント体系としての一貫性を持った記述ができる。

1. 活用形の形態・アクセント分析

本稿は「活用形アクセント」の記述に屋名池誠の一連の論考——屋名池(1986.10, 1987.1, 1987.9, 1988.1, 1988.2, 1988.3, 1988.9, 1988.11, 1989.2, 1992.6, 2005.10)——の述部活用形の形態・アクセント分析を利用する*1。議論の前提とし、また各種定義を行う都合上、やや長くなるが概略を整理して示す。

*1 同様の分析はほかに中山昌久により行われている。中山(1981.3, 1982.1, 1984.1, 1988.2, 1992.2, 1994.2, 1995.2, 1999.2)などを参照。

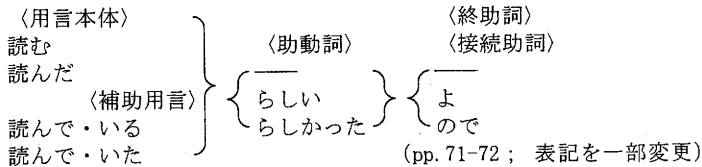
1.1. 活用形の形態分析

1.1.1. 概観

大まかな枠組みについては屋名池(2005.10)に従う。

- (1) 述語＝用言複合体は

用言本体——補助用言——助動詞——終助詞・接続助詞
という構成をもっている。用言本体・補助用言・助動詞・助詞はそれぞれ「語」である。[…]



- (2) 「語」の内部は、意味・機能を表す形態素を順次つないだ形をしており、それぞれの形態素の形はほとんど一定で変わらない。語形変化は形態素と形態素の境界部分で起こるにすぎないのである。

[…]

活用語を構成している形態素はその出現位置により、「語」の先頭に現れる「語幹」、末尾に現れる「語尾」、その中間に現れる「接辞」に分けることができる。接辞は一定の順で複数個現れることもある。

たとえば「読む」は'jom-u, 「読ませる」は'jom-ase-(r)-u, 「読ませられる」は'jom-ase-(r)-are-(r)-uと形態素に分解でき、'jom-が語幹、-ase-と-are-が接辞、語尾が-uである。(p. 72 ; 表記は本稿に合わせた)

これを受けて本稿では次のように規定する。

- (3) a. 「用言本体」「補助用言」「助動詞」「助詞」は屋名池の用語法による。
b. 助動詞・助詞およびコピュラは「付属語」。
c. 用言本体および体言は「自立語」。補助用言も一応自立語に入れる。

本稿で「活用」は

- (4) 語幹と語尾、あるいは語幹と接辞、接辞と語尾が結びつくこと、また、それによって1「語」を形成すること

をさし、そのようにしてできた語を「活用形」と呼ぶ^{*2}。たとえば/kakimasu/は動詞kakの活用形のひとつである。

参考までに、(2)のようにして東京方言の活用語を要素に分解した一覧は【表1】のようである。屋名池(1987.9)などを参照しつつ筆者の責任で作成した^{*3}。助詞は省略。記号 &, %, \$^{*4}は「動詞活用」「形容詞活用」「名詞活用^{*5}」を表す(屋名池1987.1, 1988.1, 2005.10を参照)。これら分解された活用形の要素とその連結は、表層音韻レベルより1段「奥」のレベルであり、/ /に入れずに示すものとする。助詞(や名詞)に関してはこのレベルを想定する必要はないが、活用語に揃えてこのレベルで記述することがある。

【表1】

《語幹》	《接辞》	《語尾》
◇用言本体 kak&, tob&, 'oki&, 'ake&, ... samu%, 'aka%, ... zaNneN\$, kiree\$, gaQkoo=\$, ...	are&, ase&, e&, soo\$, mas&, na%, ta%, 'jasu%, niku%, 'o——'itadak&, 'o——s&, 'o——ninar&, 'o——, qar&	u, e/o, una, eba, oo, N, zu, zuni, naide, ni, na, nagara, 'o——, ta, tara, tari, taQte, te(→補助用言へ), cja(a) i, kaQta, kaQtara, kaQtari, kereba, ku, kute, kuQte, kucjaa, kutaQte
◇補助用言 (CVCVte) mora 'w&, 'jar&, 'aje&, kure&, 'itadak&, kudasar&, sasi'aje&, 'ik&, 'juk&, ku&, 'ar&, 'i&, 'iraQsjar&, 'ok&, mi&, sima'w&, hosi%		
◇助動詞 'joo\$, soo\$, rasi%, daroo, desu, desjoo, kamo-sirena%, ni-cinjaina%		

*2 屋名池(2005.10:72)の用語法に近いが、屋名池は補助用言の派生なども「活用」に入れる。本稿ではそのような「別「語」の派生」は「活用」に含めないことにする。後述する活用形アクセントは1語内≒1アクセント単位内での規則をさすことになるので、「活用(形)」の指すものもそれに揃えようとするものである。とはいえこの用語法にそれ以上のこだわりはない。なおコンピュータの語形変化は「活用」とは呼ばないことにする。

*3 屋名池とは違って喉音素素/' /を用い、長音に/R/は用いず、チ・ツとチャ行には(/ti, tu, tj-/ではなく) /ci, cu, cj-/を用いる。引用部分も適宜置き換えた。屋名池のとする表記方法は音韻的規則を記述する上での合理性をもにらんでいるのかもしれない。しかし本稿はアクセント記述に重点を置いており、また両者の記述法は1対1に置換することができることもあり、この変更は特に問題ないと考えた。また東京方言にもガ行鼻音/ŋ/を認める。

*4 屋名池の用いる・, -, ◦から変えた。

*5 名詞はコンピュータ以外に、単に助詞が接続することもあり、本稿はそれをも取り扱う。「名詞活用」の用語と記号\$は、あとに接辞やコンピュータが続くときのみ用いることにする。なお「名詞活用」の用語は屋名池(2005.10)では使われていない。

東京方言のコピュラは(5)のように語形変化する*6。

(5) da, na, ni, de, daQta, daQtara, daQtari

1.1.2. 具体例

以上に関して最小限の具体例を(6)に挙げておく*7。要素の結合は・で示す*8。動詞活用要素のあとでは「活用部」(屋名池1987.1を参照)を()で示す。||は「語」の境界。

(6) a. 用言本体

「書く」「起きる」 kak&(φ)・u, 'oki&(r)・u
「書かせます」 kak&(φ)・ase&(φ)・mas&(φ)・u
「寒い」「寒ければ」 samu%・i, samu%・kereba
「寒そうだ」「寒がる」 samu%・soo\$・da, samu%・ŋar&(φ)・u

b. 用言本体(語尾te)+補助用言

「書いてみる」 kak&(音便)te || mi&(r)・u
「起きてくれなかった」 'oki&(φ)・te || kure&(φ)・na%・kaQta

c. 用言本体+助動詞

「起きられただろう」 'oki&(r)・are&(φ)・ta || daroo
「書かれたかもしれない」 kak&(φ)・are&(φ)・ta || kamo || sirena%・i

d. 用言本体+補助用言+助動詞+終助詞

「起きてみたでしょうか」 'oki&(φ)・te || mi&(φ)・ta || desjoo || ka

これ以降活用部と「語」の境界表示は必要のない限り略し、「kak&・ta%・i daroo」などと表す。

1.2. 活用形のアクセント分析

屋名池(1987.9, 1992.6:34ff.)を筆者の責任で要約して示す。

1.2.1. +アクセント・-アクセント

用言のアクセントで、東京方言の「起伏式」に相当するものを+アクセント、「平板

6 屋名池(2005.10:77)。/de'wa, demo/*の*'wa, mo/*は助詞に入れた。

7 'wおわりの要素を活用させた結果生じる'wi, 'wu, 'we, 'wo*については'wを削除する。その他、音便形の形成、不規則動詞(いわゆる“変格活用”をその中心とする)など方言によって諸規則を設けるが、省略に従う。屋名池(2005.10)を参照。

*8 ハイフンは後述の-アクセントと紛らわしいため避けた。

式」に相当するものを「アクセントと呼ぶ^{*9}。この+/-を「アクセント素性」と呼ぶ。語幹あるいは接辞のもつアクセント素性を当該語形の前に表示する（アクセントを問題にしない場合は省略）。

(7) +hasir&, -susum&, +siro%, -' aka%

1.2.2. 活用形のアクセントの指定

活用形のアクセントは

(8) アクセントの+/-ごとに、かつ、語尾ごとに；後ろから計数する形で決まっている。よって語尾について、潜在的な核^{*}を(9)のように指定し、(10)のように定める。

(9) CV*Cu*na, CV*CVta*ri, CV*Cu, CV*Ce/o, CV*CVta, Co**o, na*ŋara

(10) +アクセント類についたときは左から1番目の潜在核を、-アクセント類についたときは左から2番目の潜在核を、アクセント核として出現させる（2番目がない場合は出現しない）

具体例は(11)。この潜在的な核を本稿では「潜在核」、2つを区別するときには「第1（潜在）核」、「第2（潜在）核」とよぶことにする。潜在核に対して、実際に出現したアクセント核を特にいうときは「顕在核」とよぶ^{*10*11}。

以上のような、アクセント素性と潜在核との組み合わせで活用形のアクセントを形成するはたらきを「活用形アクセント」と呼ぶことにする。以下にいくつか例を挙げる^{*12}。

*9 金田一語彙の第2類、第1類に相当する。ただし金田一語彙の類別は語ごとに固有のものであるのに対し、+アクセント/-アクセントはアクセントの実態の方に合わせる。たとえば第2類の語でも東京方言で平板式になっている語は-アクセントに入れる。

*10 (見)+mi&などの短い語幹の場合、たとえばCV*CVtaで第1核を実現するための音形がないので、核が後ろへ動き/mi]ta/と実現する。「どの方言アクセントでも、基底核 [=潜在核] で指定される位置に音形がない場合、実在の最初のCVまで核が後退してあらわれる」(屋名池1987.9:102)。

*11 一部の接辞は自身がアクセント素性を持つ。(走)+hasir&,(進)-susum&に対して、

(i) /hasirima]su, susumima]su/

CV*Cu, CV*CVtaの第1潜在核が実現しているから全体は+アクセントである。よって、

(ii) mas&, ŋar&が+アクセントの性質を持っており、それより前に出てきたアクセント素性が打ち消されている

とする。アクセント素性は後に出てきたものがそこまで全体の+/-を決める(ase&, are&などは前のアクセント素性をそのまま素通しする)。

*12 東京方言の形容詞のアクセントはゆれが大きいですが、一々記述せず適宜代表形以示す。ゆれは潜在核の位置の違いとして記述することができる。

/]/はアクセント核（下げ核^{*13}）, /=/は無核を表す。

- (11) (走) +hasir&・CV*Cu /hasi]ru/
 +hasir&・ase&・are&・CV*CVta /hasirasera]reta/
 +hasir&・ta%・+nar&・CV*CVta /hasiritana]qta/
 (進) -susum&・CV*Cu /susumu=/
 -susum&・ase&・are&・CV*CVta /susumaserareta=/
 -susum&・ta%・+nar&・CV*CVta /susumitana]qta/
 (寒) +samu%・CV*i /samu]i/
 +samu%・CV*CV*kaQta /sa]mukaQta/
 (赤) -'aka%・CV*i /'akai=/
 -'aka%・CV*CV*kaQta /'aka]kaQta/

屋名池(2005.10)はここからさらに流れ図を用いた一般化を行うが、本稿では潜在核での表記にとどめておく。

1.2.3. アクセント単位

- (12) アクセントの面からは1「語」=1アクセント単位と概略いえる。

(屋名池1988.1:203)

とある。「1語」が概略1アクセント単位をなすとは、

- (13) アクセント単位境界は「語」境界と重なる；「1語」は原則として複数アクセント単位とも、また、1アクセント単位未満ともならない

ことにほかならない（ただし後接する語の影響で、その語が結果的に1アクセント未満となることはある）。つまり活用形アクセントは原則として「1アクセント単位の内部のアクセントがどのように決まるか」についての規則である。

活用する語は、語幹のみあるいは語幹と接辞のみで発話されることはなく、ちょうど語幹～語尾というひとまとまりを最小単位として実現する。それがアクセントの面からみて1アクセント単位となることは自然なことであるといえる。

この原則(13)は大きな傾向性から経験的に帰納されるものであり、少数ながら反例(=アクセント単位境界が「語」の境界と重ならない場合)も存在する。アクセント単位の境界を記号|で表すことにすると、たとえば鹿児島方言の「ゴチャッ」は「ゴ|チャッ」(木部暢子1989.5=2000.2:47ff.)、鹿児島県黒島大里方言の「ゴトアイ」は「ゴ|トアイ」(上野善道2001.10=2002.3:96)だという。本稿3.3.3節に述べる例も(13)の反例とせざるを得ない。

原則(13)は第2節以降で述べる付属語アクセント分析の前提ともなる。

*13 核の名称と定義は上野善道(1989.5:202注1)に従う。

1.3. まとめ

屋名池誠による述部活用形の形態・アクセント分析の概略を示した。述部に限らず活用語一般にこの規則が成り立つ。ここで述べられたことはすべて「1語=1アクセント単位内のアクセントがどう決まるか」についての規則である。

では、語に別の語が連なるときにはどのようなアクセントを形成するだろうか。次節で述べるのは、付属語が連なるときに、アクセントの面からみた「連なり方のタイプ」にどのようなものがあるか、ということである。これは活用形のアクセントとは独立である。

2. 付属語アクセント

「付属語」、すなわち「助動詞」「助詞」「コピュラ」のアクセントについて述べる。これらのアクセント記述は屋名池(1987.9)に示されたものだけでは不十分で、付属語内部のアクセントに加え「接続型」を記述する必要がある。

2.1. 「接続型」の必要性

たとえば「走らせられたらしかった」hasir&·ase&·are&·ta rasi%·kaqtaのアクセントについて、これまで述べてきた活用形アクセントから

$$(14) \quad +\text{hasir}\&\cdot\text{ase}\&\cdot\text{are}\&\cdot\text{CV}\cdot\text{CVta} \quad +\text{rasi}\% \cdot \text{CV}\cdot\text{CV}\cdot\text{kaqta} \\ \rightarrow /hasirasera]reta/ /ra]sikaqta/$$

となるが、全体の実現形としては

$$(15) \quad /hasiraseraretara]sikaqta/ \quad (\text{全体で1アクセント単位})$$

となる。つまり、自立語（あるいは付属語）に付属語が接続する場合、それぞれの語のアクセントを単純に並べるだけでは十分ではない。一般に付属語は自立語と違って必ずしも自分自身が独立したアクセント単位をなすとは限らず、rasi%のように「前接アクセント単位と融合し、かつアクセントを自分のものに引き寄せる」タイプなどがある。

付属語が前接語に対してアクセント上、どのように付くかという特徴を「れんせつがた接続型」と呼ぶことにする。「接続型」は後接する付属語側の特徴として記述されるものである。たとえばrasi%の活用形が前接語に対して付くときの上のような特徴は「rasi%の接続型」として記述される。

「接続型」はアクセント核に関する特徴ではなく、

$$(16) \quad \text{接続部分のアクセント単位構成上の特徴}$$

である。具体的には、「前のアクセント単位に融合するか、あるいは付属語自身が独立

して1単位をなすか」といった類別である。

付属語アクセントの記述は、付属語自身のアクセント（例、/rasili/）と「接続型」（例、支配型）の記述とからなる。付属語が活用する場合は、自身のアクセントは活用形アクセントによって決まり、そのあとで（語幹の）接続型によって最終的なアクセントが定まる。

2.2. 「接続型」の定義

東京方言の付属語の接続型を次のように定義する。記号|はアクセント単位境界。

(17) a. 独立型 前接アクセント単位とは別の、独立した1アクセント単位をなす。

アクセント上は自立語と違いがない。無印

例、/daro]o/ : /'jama]/ + /daro]o/ → /'jama] | daro]o/
/'jama]/はそのまま1単位となり、/daro]o/は独立した別の1単位をなす。

b. 非独立型 前接アクセント単位と融合し、全体で新しい1アクセント単位となる。

b-1. 従属型 アクセントは前接アクセント単位のもの保存される。付属語自身は原則としてアクセント（核）をもたない。記号 …

例、/…ŋa/ : /'jama]/ + /…ŋa/ → /'jama]ŋa/
/'jama]/に融合して新しいアクセント単位/'jamaŋa/を作る。アクセントは元の/'jama]/を保持する。

b-2. 支配型 アクセントは付属語側が決定する。前接アクセント単位を持つアクセント（核）は消される。記号 ⇒

例、/⇒ŋu]rai/ : /'jama]/ + /⇒ŋu]rai/ → /'jamaŋu]rai/
/'jama]/に融合して新しいアクセント単位/'jamaŋu]rai/を作る。アクセントは前接語に関わらず一律に、/ŋu]rai/に変えてしまう。

「前接アクセント単位」は「前接語」と事実上ほぼ等価である。

ここで少し研究史にふれる。この3分類は筆者の創案ではない。同様の3分類を最初に提案したのはおそらく和田実(1969.12=1980.2:156ff.)で、「甲類（独立する辞）・乙類（従属する辞）・丙類（融合する辞）」がそれぞれ独立・従属・支配型に相当する。和田はその後和田(1971.10:557ff., 1984.2:450ff.)でも同様の分類をしている。ただし和田説は適用範囲が広く、本稿における「活用形」もこれで説明しようとする。また川上泰(1973.3:36)の「自立語を支配するもの・自分のアクセントをもつもの・積極的なアクセントをもたないもの」という3分類はそれぞれ支配・独立・従属型に相当する。上野善道(1981.11:116-117, 1992.10:159, 161)の「独立型・従属型・支配型」も同様の分類である。本稿では「従属型」「支配型」をまとめて「非独立型」とした。

「連接型」に似た概念は上記3者のほかに、榎垣実(1963. 3:41ff.)における「型」、木部暢子(1980. 11:46ff., 1982. 9:65ff., 1983. 9:28)における「式」、田中宣廣(2005. 10:96)における「式」がある。

この都合6説は「当該付属語と前接語との関係」に着目している点では同じであるが、和田・川上・上野説が「アクセント単位」によって定義するのに対し、榎垣・木部・田中説は核をどのように持つかあるいは動かすか、という形で定義し、「アクセント単位」はそもそも考慮していないという点に決定的な違いがある。しかしながら、付属語のアクセントを論ずるにあたってこの違いが積極的に語られることはなかった。筆者は「アクセント単位」を重視することによって自立語のアクセントとの関係が明らかになり、より統一性のある記述ができると考える。これが本稿の主眼である。詳しくは第4節で述べる。

連接型の説明に話を戻す。これら連接型の定義はあくまでアクセント単位の構成、および非独立型でのアクセントの「決定権」に関するものであり、アクセント(核)の様相(有核化する、無核化する、あるいは核をどこに動かす、など)を具体的に規定するものではない。非独立型における「付属語自身は原則としてアクセントをもたない」、「前接アクセント単位の持つアクセントは消される」といった規定も、無核(化)を意味するのではなく、当該のアクセント単位におけるアクセントの決定権がないという意味である*14。さらに、東京方言に限らず、付属語接続時のアクセント単位の構成としては論理的に「独立型/非独立型」の2タイプにまず分類されるであろうことが重要である*15。

活用する付属語には「⇒rasi%」のように活用形アクセント処理(潜在核表示)レベルにおいて連接型記号をも付すが、上でふれたとおり連接型の処理は活用形アクセントの処理後に行われる。

2.3. 「連接型」の具体例——東京方言の付属語のアクセント

「連接型」の具体例として、東京方言の付属語をとりあげる。あくまで例示であるため個々のアクセントの事実認定そのものにはこだわらない。音声レベルの表記はカタカナで行い、[は声の上げ、]は下げを表す。ガ行鼻音は区別しない。語例は体言では「友

*14 従属型は「無核」とは異なる。「無核」は「どこでも下がらない」というアクセント的特徴を持っているが、従属型付属語は究極的にいえば単に前接アクセント単位の長さを延長する要素で、アクセントに関しては前接語に依存する。島根県見島方言では、従属型付属語が付くことで前接語の隠れた核が現れる(上野前掲1992. 10)。

*15 ただし方言によっては特殊な挙動をとるものがあり(1.2.3節)、それは「特殊型」とせねばならない。4.2.2節も参照。

達, カマキリ, 唐傘, 弟] /tomodaci=, ka]makiri, karaka]sa, 'otooto]/, 用言では
「走る, 進む」 +hasir&, -susum&。

2.3.1. 助詞

(18) 独立型

a. /sa]'e/

ト[モダチサ]エ/tomodaci= | sa]'e/

[カ]マキリサ()エ/ka]makiri | sa]'e/

カ[ラカ]ササ()エ/karaka]sa | sa]'e/

オ[トート]サ()エ/'otooto | sa]'e/

b. /ma]de/

ス[スムマ]デ/susumu= | ma]de/

ハ[シルマ()]デ/hasi]ru | ma]de/

c. /▽daro]o/ (▽は「前接語が無核であるときのみそこに核が出現する」ことを表す。これを「下接性」と呼ぶことにする。2.3.3.1節を参照)

ス[スム]ダロ()ー/susumu | daro]o/

ハ[シルダロ()]ー/hasi]ru | daro]o/

(19) 従属型

a. /…de/

ト[モダチデ/tomodacide=/
[カ]マキリデ/ka]makiride/
カ[ラカ]サデ/karaka]sade/
オ[トート]デ/'otooto]de/

b. /…▽ka/

ス[スム]カ/susumu]ka/
ス[スマレル]カ/susumareru]ka/
ス[スマサレタ]カ/susumasareta]ka/
ハ[シルカ/hasi]ruka/
ハ[シラレ]ルカ/hasirare]ruka/
ハ[シラサ]レタカ/hasirasa]retaka/

(20) 支配型

a. /⇒ɲu]rai/

ト[モダチグ]ライ/tomodaciɲu]rai/

カ[マキリグ]ライ/kamakiriɲu]rai/

カ[ラカサグ]ライ/karakasaɲu]rai/

オ[トートグ]ライ/'otootoŋu]rai/

b. ⇒rasi%

ス[スムラシ]ー/susumurasi]i/

ス[スマサレタラシ]ー/susumasaretarasi]i/

ハ[シルラシ]ー/hasirurasi]i/

ハ[シラサレタラシ]ー/hasirasaretarasi]i/

(20b)で、rasi%自体のアクセントは活用形アクセントにより/rasi]i, ra]sikaŋta, …/などと決まる。これが前接語を支配して/-rasi]i, -ra]sikaŋta, …/という1単位にする^{*16}。支配型はアクセント的には接尾辞や複合名詞後部要素と共通点を持ち、むしろそちらの語類と考えることもできよう^{*17}。

また連体の/no/は基本的には従属型であるが、前接語の末位核を消す働きがあることがよく知られている。

2.3.2. コピュラとその周辺

コピュラは語形変化するが、アクセント上は助詞と同じように扱うことができる。東京方言のコピュラのアクセントは

(21) /…da, …na, …ni, …de, da]ŋta, da]ŋtara, da]ŋtari/

と書ける。たとえば「山」/'jama]/に対して

(22) /'jama]da, 'jama]ni, 'jama] | da]ŋta, …/

となる (daŋta以下、核が有核語のあとでも生きているかどうかはいま問題外)。

名詞活用の助動詞「'joo\$/soo\$+コピュラ」はアクセント上は「名詞 ('jo]o, so]o/) +助詞」相当として扱える。そもそも名詞は活用形のように潜在核表示のレベルを考える必要はなく、はじめから核の位置が決まっているから、動詞活用・形容詞活用をする

*16 川上 肇(1977. 12=2005. 2:346)には

(i) ア[ルカセラレナカッタラシ]ー/'arukaserarenakaŋtarasi]i/

という長い1単位の例が挙げられている。

また、支配型が2つ連なると次のような長い1単位をなす。

(ii) ポンドはいま120円ぐらいらしい。
/hjakunizju]u'eŋ/ + /⇒ŋu]rai/ + /⇒rasi]i/
→ /hjakunizjuu'eŋŋu]rai/ + /⇒rasi]i/
→ /hjakunizjuu'eŋŋurairasi]i/

なお、別に、2単位形 ハ[シ]ルラシ()ー /hasi]ru | rasi]i/ となる独立型もあるようである。まとめて書くには (⇒)⁺rasi% とする。

*17 仮に接続型記号を使うとすれば、たとえば接尾辞の「～的」は全体を無核化するので/⇒teki=/と書くことができる。

要素と同列に扱う場合にも] を用いて単に 'jo]o\$, so]o\$ と書くことにする*18。

接辞のsoo\$は問題がある。

- (23) +hasir&・soo\$・da /hasiriso]oda/
+hasir&・soo\$・daQta /hasiriso]o | da]Qta/ (/daQta/の核は存疑)
-susum&・soo\$・da /susumisooda=/
-susum&・soo\$・daQta /susumisoo= | da]Qta/

(23)のように+アクセントのときだけ/-so]o-/となる。この核は第1潜在核相当ということになるが、潜在核を設定すべき語尾がない。soo\$は接辞の中では最後尾にくる(名詞活用に付くjar&はsoo\$のあとにはこない)から、「soo+コピュラ」がひとまとまりで一種の語尾のような状態にある。よって暫定的な解釈として、潜在核でso'o\$と書くことにする*19。

2.3.3. 問題点

2.3.3.1. 「下接性▽」について

すでに記号▽で表しているとおり、東京方言の付属語では「下接性」という概念を立てねばならない。前接語が無核である場合に、その末位に核を置いた上で付属語が付くことを意味する*20。このタイプは従属型でもアクセント的にまったくの無色ではないことになる。なお、「付属語頭の何もないところにも核を認めている」ように見えるがそうではなく、あくまで前接語の末位に核を置くということである。

屋名池誠(1987.9:96)ではこの核を、前にくる語尾の潜在核として記述している。たとえば語尾u, ta, … は「CV*Cu, CV*CVta, …」のほかに「CV*Cu*, CV*CVta*, …」の場合があり、darooは後者に続く、というふうに。しかしこれはひとえに付属語側の問題であり、darooに「下接性」という属性を付して▽darooとした方が簡単である。

2.3.3.2. 東京方言における独立型無核／従属型の認定

東京方言の付属語で核を持たない「カラ」などは、独立型無核であるか従属型である

*18 屋名池は基底レベルでは記号「|」を用いてso|o\$と記述する(屋名池1987.9:96)。名詞のアクセントも同じようにし、名詞に続くコピュラや助詞の方には潜在核を設けて説明するが、その必要はないと考える。

*19 ただし-アクセントでも/-so]o-/と核を持つ場合もある。そちらはso'o\$と書ける。

*20 これは登米市方言の一部の従属型付属語におけるように[…]ka/とすることはできない(3.4節を参照)。東京方言は従属型だけでなく独立型の/daroo/なども下接性で▽daroo/となる(「行く」/'iku=/に対して/'iku | daroo/) ためである。

かの認定が難しい。基本的に音調型から判断することはできないのである。東京方言の助詞の問題を正面から扱った川上泰(1966)では、プロミネンスが置かれた音調なども考慮し、1モーラ助詞は本稿でいう従属型、2モーラ以上の助詞は独立型と一律に認定している。本稿も基本的にそれに従い、カラなどは一応「独立型無核」と見る。ただし、サエやマデを独立型とする(pp. 242-243)ことはともかく、カラを独立型とする(p. 244)ことについては、そう見なければならぬ(=従属型ではない)理由ははっきりとは述べられていない、ということに注意せねばならない。

音調型からアクセント単位をどの程度認定できるかは、方言によっても異なる。たとえば松江市方言の付属語は、句頭上昇の位置を名詞単独の形から動かすものと動かさないものがあり、それをもって独立型/従属型が分かれるようである(上野善道1981. 11:116)。

2.4. 活用形・付属語アクセントの全体像

活用形アクセントは「アクセント素性」と「潜在核」を用いて記述したが、それは原則として「1アクセント単位を構成するためのアクセント規則」であった。語幹～語尾からなる1アクセント単位は核を1個あるいは0個持つが、核の位置は一定でなく、活用によって移動する。その位置が語幹・接辞・語尾からどのように決定されるかを記述する。

一方「接続型」は、「いったんできあがった1つのアクセント単位に対して別の語が付くときに、それがアクセント上独立するか否か」という、アクセント単位の構成のしかたである。

この2つはレベルが異なり、活用する付属語は先に活用形アクセントによって核が決まったあと接続型の適用を受ける。

「補助用言」は一応自立語に入れるので本節では述べていないが、常に「用言本体」に先立たれてのみ存在するという点では付属語的でもある。そこでもし接続型を定めるならばすべて独立型ということにすればよい。

アクセントを形成する一連の手順をまとめる。たとえば「書かせたらしいけれど」は、まず「kak&·ase&·ta」, 「rasi%·i」は活用形アクセント, 「keredo」は自身の持つアクセントから(25)となり、(26)のようにアクセントが決まる。ついで「接続型」が処理され、結局(27)のようにアクセントが決定される。最後に「句音調^{*21}」がかぶさり(句を{ }で表す)、たとえば(28)という実現音調ができあがる。

(24) kak&·ase&·ta || rasi%·i || keredo

(25) ⁺kak&·ase&·CV·CVta, ⇒⁺rasi%·CV·i, ke]redo

*21 川上泰(1961. 5=2005. 2:136ff., 2000. 9)や上野善道(1989. 5:183ff., 2002. 1:165ff.)を参照。

- (26) /kaka]seta/, /⇒rasi]i/, /ke]redo/
 (27) /kakasetarasili | ke]redo/
 (28) {カ[カセタラシ]ーケ]レド}

同様に「歩かせられなかったかもしれない」なら次の通り。(33a)は1句の場合、(33b)は「かもしれない」を強調的に発音し、2句になった場合の例。

- (29) ' aruk&·ase&·are&·na%·kaQta || kamo || sirena%·kute
 (30) +' aruk&·ase&·are&·na%·CV*CV*kaQta, ∇ka]mo, -sirena%·CV*CV*kute
 (31) /' arukaserare]nakaQta/, /∇ka]mo/, /sirena]kute/
 (32) /' arukaserare]nakaQta | ka]mo | sirena]kute/
 (33) a. {ア[ルカセラレ]ナカッタカ]モシレナ]クテ}
 b. {ア[ルカセラレ]ナカッタ} {[カ]モシレナ]クテ}

3. 登米市方言の活用形・付属語のアクセント

ここまで述べてきた枠組みを利用して、宮城県登米市方言の活用形と付属語のアクセントについて記述する。

本節は筆者（登米市石越町^{いしこしまち}出身、1984年生まれ）の内省と、筆者の母（登米市迫町^{はさまちよう}出身、1956年生まれ）と祖父（登米市石越町出身、1926年生まれ）への調査に基づく。

語形に関する注記。老年層（70歳以上）の言語を想定している。活用による'wの削除規則や音便形などは東京方言と同じである。そのほか、活用で生じた/si, ci, zi/はそれぞれ/su, cu, zu/になる^{*22}。語中では原則として/k, t, c/が有声化して/g, d, z/になる^{*23}。たとえば「語尾ta」とあっても、実際には有声化でdaとなることがある。taの場合、たとえばkasuta（貸した）など有声化しない場合があるので一般的に書く場合にはtaで書く。一方形容詞語尾のgaQtaはいかなる場合でも有声化した形しか現れないので、一般的に書く場合でも（kaQtaではなく）gaQtaで書く。

語中濁音の前鼻音は老年層では聞かれるが弱まっており、ことに付属語では現れにくい。記述するならば精査する必要があるため今回は省略した。

この方言に近いものとして、宮城県志津川町（現 南三陸町志津川）の用言のアクセントを記述した大西拓一郎(1990.3)がある。音調型は一部異なっている。

*22 これにより母音uおわりの動詞語幹ができる場合があるが（たとえば「落ちる」'ozu&, iおわりと同一視する。ただし筆者の世代は/si, ci, zi/を持っている。

*23 動詞「行く」は例外的に/'igu/のほかに/'iju/があり、老年層は併用（後者が優勢）、筆者の世代では前者のみ。以下 後者で代表させる。

3.1. 方言形について

活用形で共通語と異なる部分についてごく簡単に述べれば、

(34) 過去形に、ta形(第1過去形)のほかにはtaqta形(第2過去形)が認められる*24。

(35) 丁寧形は、

- a. 「ます」に相当する形としてsuがあり、「書きます」=/kagisu/、「書きました」=/kagisuta/などとなる。その否定はsenおよびそこから/s/が脱落した'eNで、形容詞的に活用し、/kagi'eN, kagi'eNkaqta/となる。
- b. 「(で)ございます」に相当する形として(de)gasuがあり、存在詞の丁寧形は/gasu/、また「本です」=/hoNde gasu/、「赤いです」=/'agegasu/、「白かったです」=/surogasuta/などとなる。その否定はgaseNおよびそこから/s/が脱落したga'eNで、形容詞的に活用し、/hoNde ga'eN, 'agegu ga'eN; -ga'eNkaqta/となる。

(36) 「(よ)う」に相当する形としてbe/peがある。これは活用せず助詞扱い。

このうち(34)(35)は筆者自身は持たないが、これは世代差によるもので、老年層の会話としては日常よく耳にする。活用体系に関して詳しいものとしては八亀裕美他(2005.1)*25、工藤真由美他(2005.2)*26、工藤(2006.11:114)、佐藤里美(2007.7)で論じられる登米市中田町方言に近い。

なお丁寧体命令は語尾asje(工藤他2005.2:24の「セ」に相当するが活用形が異なる)のほかにはa'eNという語尾があり、/(飲)noma'eN, (起)'ogira'eN, (受)'ugera'eN/などとなる(cf. 丁寧体否定の語尾'eNは/nomi'eN, 'ogi'eN, 'uge'eN/)。

以上に関して本稿は筆者の生育地で使われるものに合わせる。

形容詞+助詞相当beでは本来形容詞がカリ活用となって/-ganbe/となるが、本稿では単純に“終止形”語尾i/φ(3.3.1節を参照)に付くタイプのほうで取り上げる。

*24 第2過去形の意味するところは工藤他(2005.2:1)によれば「発話主体の体験性を明示する」とのことである。一方第1過去形は体験性に関して中立であるとされる。

*25 ただし筆者の生育地=石越町(中田町と隣接)ではtaqta形が用いられるのは動詞・存在詞にほぼ限られ、存在の否定「ない」や形容詞(第1形容詞)、「形容動詞」(第2形容詞)、コンピュータのダに対してtaqtaはまず使わない。

*26 「否定形(不可能形)は「しえない」から転じたであろう「サエネ」の形である」(p.15)とあるが、「サレナイ」の/r/の脱落であろう。/r/の脱落しない形も時々使われ、書けない/kaga'ene, kagarens/, 起きられない/'ogira'ene, 'ogirarens/などとなる。

「意志勸誘法」(p.23)の「ノムベス」「ノンデッベス」のsは「丁寧」の意ではなく終助詞的なものようである(大西1990.3:57補注)。

また「ゲンキデッカス」(元気でいる+丁寧; p.12)は筆者は聞いたことがない(「ゲンキデガス」は使う)。

3.2. 動詞・形容詞のアクセント

3.2.1. 概観

結論からいえば、動詞・形容詞の+/-アクセント素性は登米市方言では次のような特徴をもつ。

- (37) +アクセント：必ず核を出現させる。
-アクセント：必ずしも核を出現させない。出現させる場合、+アクセントよりも後ろ。

“終止形”で示せば以下の通り。

- (38) 動詞 +アクセント (戻) /modo]ru/ -②
-アクセント (進) /susumu=/ @*27
形容詞 +アクセント (白) /suro]i/ -②
-アクセント (赤) /'agε=/ @

結局、終止形に関しては東京と全く同じということになる*28。

3.2.2. 陳述イントネーション

ただしこの方言では「陳述イントネーション」がある。これは文末におかれた用言の末尾の音節が浮き上がるイントネーションで、上野善道(1980.7)で岩手県栗石方言について詳しく観察されているほか、山形県鶴岡方言(新田哲夫1994.9)、青森市方言(上野1986.3)などでもこれを立てた分析がなされている。

音調型は(39)の通りである。音声表記は便宜的に音韻表記を流用し、ピリオド(.)は文末であることを、!は]よりも幅の小さい下降(「半下降」)を表すものとする。さらに、陳述イントネーションがどこに被さっているかを示すために当該音節の母音に、'を付すことにする*29。

- (39) 動詞 (見) [mi!rù. /mi]ru/ +アクセント
(戻) mo[do!rù. /modo]ru/ +アクセント
(隠) kagu[re!rù. /kagure]ru/ +アクセント
(着) ki[rù. /kuru=/ -アクセント
(進) susu[mù. /susumu=/ -アクセント
(重) kasane[rù. /kasaneru=/ -アクセント

*27 @は丸ゼロの代用として用いる。

*28 「通る」などが/to]oru/と-③型になるのも東京と同じ。

*29 あくまで位置を明示するのみで、イントネーションの音調自体は[などによって表示。

形容詞	(無)	[nɛ̃.	/nɛ̃/	+アクセント
	(白)	su[ro!i.	/suro]i/	+アクセント
	(面白)	'omo[sjẽ.	/'omosjẽ]/	+アクセント
	(赤)	'a[gɛ̃.	/'agɛ̃=/	-アクセント
	(*30)	kika[nɛ̃.	/kikane=/	-アクセント

たとえば [mi!rũ. は, [mi]ru の ru がイントネーションによって浮き上がるために、結果として下降幅が小さくなって [mi!ru となったものである。

「着た」と「見た」は /kita= / と /mida] / であるが、文末では

(40) ki[tã. ; mi[dã.

でまったく区別がなくなってしまう。区別が現れるのは連体修飾の場合などである。よって用言のアクセントは“終止形”言い切りではなく連体修飾などの環境を適宜作って調べた*31。

3.3. 活用形のアクセント

登米市方言の活用形のアクセントについて述べる。

3.3.1. 接辞・語尾のアクセント

接辞は(41)の通りで、自らがアクセント素性を持つものは s& のみである。語尾の潜在核は(42)(43)のように抽出される。

(41) ase&, a'e&(are&), nɛ%, dɛ%*32, 'jasu%, ŋadɛ%, niɣu%, ŋar&, +s&

(42) 動詞活用につくもの

CV*Cu, CV*Ce/o, CV*Cuna, CV*Cebã, nɛ̃de, CV*CVsa, CV*CVni,
naŋãra, CV*ta*, CV*taqta*, CV*tara*, CV*tari*, CV*te*,
a'e*N, asje*, e*N, e*Nkaqta (※は3.3.2節で述べる)

(43) 形容詞活用につくもの

CV*i/φ, CV*gaqtã, CV*gaqtãra, CV*gaqtãri, CV*gerẽba, CV*gu,

*30 「きかない」=気が強い意。

*31 上野前掲(1980.7)は「同じ単語が文末以外に立った場合」(動作の列挙など)を使っている。終止法のままで調べられるという利点があるが、筆者の発音ではその場合もイントネーションがかぶさった形になることがあったため避けた。

*32 願望の「～たい」に相当。東北方言の中には有声化しない地域もあるが、当方言では常に有声化。

また、この方言の活用形アクセントで注意すべきものは次の通りで、3.3.2～3.3.5節で述べる。

(44) 解釈が容易でないアクセント

- a. 語尾 ta, taQta, tara, tari, te
- b. 動詞 + te + 動詞
- c. 接辞 s&
- d. 存在詞(丁寧形)/助動詞 gas&

形容詞の“終止形”は共通語で /-ai/ となるものがこの方言では /-ε/ となる (赤い /'age/)。また共通語で /-sii/ となるものは /-suu~-sui/ でゆれる (苦しい /kurusuu~-sui/; 後者で代表させる)。よって“終止形”相当の語尾は「i, ただし-ε%語幹に対しては φ (無形態)」とし、「i/φ」と書く。ad hoc な処置であり、なお検討の余地があるが、本稿の趣旨から外れるのでこれにとどめておく。

3.3.2. 語尾 ta, taQta, tara, tari, te

語尾 ta, taQta, tara, tari, te は核のとり方が複雑である。

3.3.2.1. 具体例

【表2】に、+/-のアクセント素性ごと、かつ、語幹末尾の子音別・母音別、母音おわりはさらに語幹の長さ別、に例を挙げる^{*34}。

+アクセント語幹では、後ろから数えた核位置が一定していない。基本的に3タイプに分けられ、仮に α・β・γ とした。その内容は(45)の通り。γ' は γ タイプの変種で、te のみ位置が異なるもの。

- (45)
- | | | | | | |
|------|----------|-------------|------------|------------|---------|
| α : | CV]CVta, | CV]CVtaQta, | CV]CVtara, | CV]CVtari, | CV]CVte |
| β : | CV]ta, | CV]taQta, | CV]tara, | CV]tari, | CV]te |
| γ : | ta], | ta]Qta, | ta]ra, | ta]ri, | te] |
| γ' : | ta], | ta]Qta, | ta]ra, | ta]ri, | CV]CVte |

*33 ge は「(～シ)ナキヤ」の「キヤ」に相当する形。うしろに形容詞 ne% をともない、

(i) 「動詞・ne%・ge ne%・～」 = 「(～シ)ナキヤナイ」 = 「～しなければならない」となる。具体的には次のとおり。

(ii) a. 書かななければならない +kag&・ne%・CV*ge[▼] +ne%・CV*i/φ → /kagane|ge|ne|/
 b. 行かななければならない -'iη&・ne%・CV*ge[▼] +ne%・CV*i/φ → /'iηanege|ne|/

*34 母音 i おわりの長い語幹の動詞はたとえば「試みる」などがあるにはあるが、日常的でないためアクセントが共通語にひきずられ、確認しづらいので除いてある。

【表2】

	ta	taQta	tara	tari	te	
+アクセント						
(書)kag	ka]ida	ka]idaQta	ka]idara	ka]idari	ka]ide	α
(出)das	da]suta	da]sutaQta	da]sutara	da]sutari	da]sute	α
(立)tad	taQta]	taQta]Qta	taQta]ra	taQta]ri	ta]Qte	γ'
(読)'jom	'joNda]	'joNda]Qta	'joNda]ra	'joNda]ri	'jo]Nde	γ'
(掘)hor	hoQta]	hoQta]Qta	hoQta]ra	hoQta]ri	ho]Qte	γ'
(起)'ogi	'ogida]	'ogida]Qta	'ogida]ra	'ogida]ri	'ogide]	γ
(落)'ozu	'ozuda]	'ozuda]Qta	'ozuda]ra	'ozuda]ri	'ozude]	γ
(見)mi	mida]	mida]Qta	mida]ra	mida]ri	mide]	γ
(諦)'agirame	'agirame]da	'agirame]daQta	'agirame]dara	'agirame]dari	'agirame]de	β
(納)'osame	'osame]da	'osame]daQta	'osame]dara	'osame]dari	'osame]de	β
(投)naje	naje]da	naje]daQta	naje]dara	naje]dari	naje]de	β
(出)de	deda]	deda]Qta	deda]ra	deda]ri	dede]	γ
-アクセント						
(覆)hag	haida=	haidaQta]	haidara]	haidari=	haide=	
(貸)kas	kasuta=	kasutaQta]	kasutara]	kasutari=	kasute=	
(※1)'odad	'odaQta=	'odaQtaQta]	'odaQ tara]	'odaQ tari=	'odaQ te=	
(死)sun	suNda=	suNdaQta]	suNdara]	suNdari=	suNde=	
(踏)hum	huNda=	huNdaQta]	huNdara]	huNdari=	huNde=	
(売)'ur	'uQta=	'uQtaQta]	'uQ tara]	'uQ tari=	'uQ te=	
(買)ka'w	kaQta=	kaQtaQta]	kaQ tara]	kaQ tari=	kaQ te=	
(借)kari	karida=	karidaQta]	karidara]	karidari=	karide=	
(着)ki	kita=	kitaQta]	kitara]	kitari=	kite=	
(重)kasane	kasane=	kasaneQta]	kasanedara]	kasanedari=	kasane=	
(止)'jame	'jamed=	'jamedQta]	'jamedara]	'jamedari=	'jamed=	
(※2)ke	keda=	kedaQta]	kedara]	kedari=	kede=	

※1 他動詞「おだてる」に対応すると思われる自動詞「おだつ」「ふざける」の意。

※2 「ける」<「呉れる」。物を「あげる」の意。補助動詞にも。

一方 -アクセント語幹では全ての場合で核位置が次のように一定している。

(46) ta=, taQta], tara], tari=, te=

接辞が入る場合、「語幹(+接辞…) +接辞」の全体を大きな1つの語幹とみればよい。たとえば「語幹(+接辞…) +nar&」は子音rおわりの大きな語幹と見ることができ、全体が+アクセントならば(掘)⁺hor&, -アクセントならば(売)⁻ur&と同じ挙動をとる。

3.3.2.2. 解釈

結論から言えば、βタイプが無標のものであると考える。これと(46)とを合わせて、潜在核は一般には

(47) CV*ta, CV*taQta*, CV*tara*, CV*tari, CV*te

で、CV部分の音形によって第1核が移動して実現し、 $\alpha \cdot \gamma / \gamma'$ の形が出る。

α タイプとなる条件は

(48) (a) CVが二重母音の副母音/i/ (=子音gおわり語幹) の場合

(b) CVが母音無声化音/su/ (=子音sおわり語幹) の場合

のいずれかである。これらは核がくることができない「弱」^{*35}であるため、(47)の第1核が1拍前で実現したと見ることができる。

γ / γ' タイプが問題である。このタイプとなる条件は

(49) (a) CVが/Ci/ (=母音iおわり語幹) の場合…… γ

(b) CVが/Ce/ (=母音eおわり語幹) かつ1拍語幹の場合…… γ

(c) CVが/N, q/ (=子音m, n, b, d, r, 'wおわり語幹) の場合…… γ'

のいずれかである。

まず(c)の/N, q/は「弱」であり、第1核が1拍後ろで実現したと見ることができる(ただしteだけは1拍前に移動している)。そして(a)もこの場合は「弱」と同じ扱いを受けると考える。/i/は狭母音であり、狭母音拍が(ある条件のもとで)「弱」となる方言はいくつか知られている^{*36}。登米市方言では狭母音拍一般が核を担えないわけではないが、これらの語尾の直前ではその制限がはたらいっていると考えればよいのではないか。

(b)は少なくとも共時的には説明がつけにくく、最も例外的といえる。また、「 α タイプでは核が前に移動するのに対して γ / γ' タイプでは核が後ろに移動するのはなぜか」、「 γ' タイプの語尾teだけ挙動が異なるのはなぜか」という点もいまのところ説明がつかない。

結局、問題の語尾の潜在核は(47)を基本とし、第1核は次の条件のときには移動して実現することになる^{*37}。

(50) a. 「弱」による移動

a-1. CVが二重母音の副母音/i/あるいは母音無声化音の場合は第1核が1拍前で実現する

*35 上野善道(2003.6:80)。登米市方言の「弱」はモーラ音素と母音無声化音。

*36 雫石方言(上野前掲2003.6)、金沢方言(上野他1983.3)など。

*37 ところで、 α タイプは東京方言の

(i) /kalita, kalitara, kajitari, kajite;
da]sita, da]sitara, da]sitari, da]site /

と同様相を示すが、それに至るメカニズムは異なっていることがわかる。東京方言は

(ii) CV*CVta, CV*CVta*ra, CV*CVta*ri, CV*CVte

という潜在核から直接に(i)が出てくる。一方 登米市方言は(47)から核の移動の結果このようになるのである。

- a-2. CYが/N, Q/または/Ci/の場合は第1核が1拍後ろで実現する (/Ci/はこの場合のみ「弱」扱い)。
 a-2'. CYが/N, Q/かつ語尾がteの場合は1拍前で実現する。
 b. 母音eおわり1拍語幹につく場合, 1拍後ろで実現する。

3.3.3. 動詞+te+動詞

「動詞+te+動詞」のアクセントは複雑な様相を呈する。2番目の動詞が補助動詞である場合にはアクセント変化が起こる。一方補助動詞でない(「本動詞」)の場合には基本的にアクセント変化は起こらない。

以下、「動詞+te+非補助動詞」を「V1+te+V2」, 「動詞+te+補助動詞」を「V1+te+V'2」と書く。

3.3.3.1. 具体例

補助動詞V'2として使われる動詞について, アクセントは次の通り。

- (51) +ku&, +'a&, +mi&, +suma'w&, -'iŋ&, -'i&, -'og&, -mora'w&, -'jar&, -ke&*38, -suke&*39, -'idadag&

これらについて, 「V1+te+V'2」のアクセントを【表3】に示す*40。行論の都合上I~IVの領域を定義した。アクセント単位の境界|は, 境界認定それ自体が問題となるためしばらく書かず, 全体が無核である場合は/=を最後にのみ記す。

3.3.3.2. 問題の所在

V1が+アクセントの場合=「I・II領域」, およびV1が-アクセントでV'2が+アクセントの場合=「III領域」は問題がない。「V1+te+V'2」のアクセントは, 「V1+te」「V'2」のアクセントをそのまま並べたものである。

- (52) V1 V'2 V1+V'2
 I /naje]de, ku]ru/ : /naje]de | ku]ru/
 II /naje]de, 'ogu=/ : /naje]de | 'ogu/
 III /haide=, mi]ru/ : /haide= | mi]ru/
 (アクセント単位の境界は上の通り)

*38 前述。「～てける」で「～してやる」の意。

*39 助(す)ける。「～て助ける」で「～するのを手伝う/一緒に～してやる」の意。

*40 語尾teががらむのでV1が+アクセントのときは実際には(45)のようなパターンがあるが, V1が+アクセントならば以下の問題にそもそも関与しないので略す。βタイプの/naje]de-/で代表させた。

α, γ/γ'タイプはこの部分を/ka]ide-, mi]de-, 'jo]Nde-/などに置き換えるだけでよい。

【表3】

	(投) +nag&		(履) -hag&
+V' 2	naje]deku]ru	I	haideku]ru
	naje]de'a]ru		haide'a]ru
	naje]demi]ru		haidemi]ru
	naje]desuma]u		haidesuma]u
-V' 2	naje]de'iju	II	haide]'iju
	naje]de'iru		haide]'iru
	naje]de'ogu		haide]'ogu
	naje]demora'u		haidemo]ra'u
	naje]de'jaru		haide]'ja]ru
	naje]dekeru		haideke]ru
	naje]desukeru		haidesuke]ru
	naje]de'idadagu		haide]'ida]dagu

(/ /は略；太枠部分が後述する特殊なアクセント)

ところが、V1・V'2とも一アクセントでのとき、すなわち「IV領域」では、いま(履) -hag&を例にとって同様に挙例すると

(53) IV a 'inj&, 'i&, 'og&は、それらの前に核を挿入する。

/haide=, 'ogu=/ : /haide]'ogu/ (* /haide'ogu= /)

IV b -mora'w&, -'jar&, -ke&, -suke&, -'idadag&は、自身の中のある特定の場所に核を挿入する。

/haide=, mora'u=/ : /haidemo]ra'u/ (* /haidemora'u= /)

つまり、「-V1+te+V'2」が特殊なアクセントをとる、といえる*41。

3.3.3.3. 活用した場合

IV a, bをさらに活用させた場合を見よう。(履) -hag&で例示すれば、

(54) a. IV a の例

/ haide]'ogu
 haide]'oge
 haide]'oguna
 haide]'oge]ba]
 haide]'ogane]de
 ?haide]'ogisa *42
 ?haide]'ogini
 haide]'oginajara

b. IV b の例

haidemo]ra'u
 haidemo]ra'e
 haidemo]ra'una
 haidemo]ra'eba]
 haidemo]ra'wan&e
 haidemo]raisa
 haidemo]raini
 haidemo]rainajara

*41 たとえば東京方言では、「V1+te+V'2」はいかなる場合でも「V1+te」のアクセントと「V'2」のアクセントを単に並べるだけでよい。

*42 言うならこのアクセントだが意味的にはかなりありにくい。その下の-niも同じ。

haide]’oida	haidemo]raQta
haide]’oidaQta]	haidemo]raQtaQta]
haide]’oidara]	haidemo]raQtara]
haide]’oidari	haidemo]raQtari
haide]’oide	haidemo]raQte
haide]’oga’e]N	haidemo]ra’wa’e]N ^{*43}
haide]’ogasje]	haidemo]ra’wasje] /

IV a では、V’2の部分は活用させると通常のーアクセントの形をとっていることが分かる。V’2が-’inj&, -’i&でも同様となる。よってIV a は

(55) -V1+teを末位核にする； -V’2は通常のーアクセントと同じ

という性質である。V1がーアクセントのときにteに定位置の核があるから、結局teの潜在核が

(56) CV*te*

となっていることになる。アクセント単位は/haide/のあとに境界があり

(57) /haide] | ’ogu=, haide] | ’ogeba], …/

などとなる。

一方IV b ほうという、V’2の中の/mo/にある核は活用しても動かない。これを単に-’mora’w&とできないのはもちろんであるし、仮に+’mora’w&としても(54b)のようにはならない。ここで「補助用言mora’wはーアクセントではなくmo]ra’w&という定位置の核を語幹が持っている；語尾の潜在核はまったく実現しない」とできればまだしも単純であるが、そうはいかない。各活用形の末尾付近において

(58) eba, taQta, taraでは末位核^{*44}；それ以外の活用形では核を持たない

となっており、これはまさにーアクセントの特徴である。

よってこのmora’w&はーアクセントの性質は保持していると判断される。それに加えて、「V1がーアクセントのときに語幹部分のmoに定位置の核を持つ」のであるから、moにteの第2潜在核を設定して

(59) CV*te -’mo’ra’w&

ということになる。-’jar&, -’ke&, -’suke&, -’idadag&も同様で、できあがりの形を語尾uの場合で示せばそれぞれ-’ja]ru, -ke]ru, -suke]ru, -’ida]dagu/である。一般

*43 このeNの核はあるかどうかやや疑わしいので以下の議論からは外す。その下のsjeも同じ。

*44 末位核であることは、次に自立語や付属語を続けて確認した。

(i) 「履いてもらえばいいのに」 haide[mo]ra’eba]’i]ino. (2回目以降の下降ははっきりとは出ない)

(ii) 「履いてもらっタツタでしょう？」 haide[mo]raQtaQta]be↑.

(iii) 「履いてもらったら(どうなの)?」 haide[mo]raQtara]’wa↑.

((ii)(iii)で疑問形を使ったのは、そのほうが下降が明瞭に出るためである。)

化して書くならば

(60) CV*te (mo/' ja/ke/suke/' ida)*

となる。

アクセント単位の認定も問題である。2つの核が出ることがあるから、全体は2アクセント単位であると予想されるが、/haide/のあとで区切った

(61) */haide= | mo]ra'eba]/

は1単位の中に2つの核があることになり不可能である。そこで、やや奇妙であるが「/haidemo/までを1単位とし、それが末位核になっている」と解釈する。

(62) /haidemo] | ra'eba]/

同様に、/haidemo] | ra'u=, haidemo] | ra'e=, …/

IV a とIV b は

(63) 「-V1+te+-V'2」の、前半のアクセント単位を末位核にする

という点で共通することになる。「前半」と「後半」の境界線が、IV a ではちょうどteとV'2の間にあり、IV b ではV'2にまで食い込む、というわけである*45。

3.3.3.4. 本動詞の場合

2番目の動詞が補助動詞でない「V1+te+V2」では、たとえV2が語彙的には補助動詞にも使われるようなもの(mora'w&, 'og&など)であっても、上で述べたようなアクセントとはならない。たとえば次のa, bを比較。

(64) a. 「代わりに窓口に行ってもらった。」(V1+te+V'2)

ka'warini_ mado[nu]zusa 'iqte[mo]raQ[tà.*46

/ka'warini= | mado[nu]zusa | 'iqtemo] | raQta= /

b. 「書類は、窓口に行ってもらった。」(V1+te+V2, 受け取ったの意)

sjorui['wa] mado[nu]zusa 'iqte_ moraQ[tà.

/sjorui['wa] | mado[nu]zusa | 'iqte= | moraQta= /

非補助動詞の場合、mora'w&が/-mo]ra-/の形をとることはなく、単純な一アクセントの形となる。'og&や'jar&も、非補助動詞であれば

(65) /'iqte= | 'ogu=, 'iqte= | 'jaru=, …/

cf. 補助動詞なら /'iqte] | 'ogu=, 'iqte'ja] | ru=, …/

というアクセントをとる。結果的には、アクセントが(64a)のようになることが「V'2が補助動詞として使われている」ことのマーカ―となっている。ただし「V1, V'2がとも

*45 ここまでの一般化はやや確信が持てない。少なくとも、語尾eba, taqta, taraをとらないものについては/kite= | mo]ra'u, kite= | mo]ra'e, …/という解釈は一応妨げられない。

*46 記号 _ は低平調を示す。

に「一アクセントのとき」にしか発現しないものではあるが。

ところで、東京方言の「持って {いく/くる}」のアクセントは(66a)が期待されるが、実際には「持って」が無核化した(66b)も許容される。こちらはV1の方のアクセント変化ではあるが、補助動詞が関係してアクセント変化が起こるという点では上記の例と似ている。

- (66) a. /mo]qte | ku]ru, mo]qte | 'iku= /
b. /moqte= | ku]ru, moqte= | 'iku= / (あるいは1アクセント単位か)

3.3.3.5. まとめ

登米市方言の「V1+te+V'2」のアクセントは、「V1とV'2がともに一アクセントのとき」にアクセント変化を起こす。「-'in&, -'i&, -'og&」はそれらの直前に核を挿入する。「-mora'w&, -'jar&, -ke&, -suke&, -'idadag&」は、自身の中のある特定の場所に核を挿入する。IV a・bとも、一アクセントの特徴は発揮される。これら核挿入はV1が一アクセントのときの現象だから、「teの第2潜在核」であると解釈される。結局、「V1+te+V'2」一般についていえば、V'2の動詞の語彙によってteのもつ潜在核が異なり、

- (67) a. -'in&, -'i&, -'og&に対しては CV*te*
b. -mora'w&, -'jar&, -ke&, -'idadag&に対しては
CV*te (mo/'ja/ke/suke/'ida)*
c. その他のV'2ではCV*te (これが無標)

ということになる。(67a, b)におけるアクセント単位境界は

- (68) 核が挿入された位置 (=teの第2核の位置) にアクセント単位境界があり、V1の先頭からそこまでを1単位、そこからV'2の終わりまでを1単位とする2アクセント単位

と解釈する。(67c)の場合は活用形アクセントの規則どおり、「V1+te」までを1単位、V'2を1単位とする2アクセント単位と解釈する。

アクセント変化は「動詞+te+非補助動詞」の場合は原則として起こらない。

3.3.3.6. 補足:補助動詞でないにもかかわらず、アクセント変化が起こる例

登米市方言では、「補助動詞でないにもかかわらず、アクセント変化が起こる」例が存在する。

- (69) a. 「パジャマを着て寝る。」
pa[zja]ma kite[ne!rù.
/pazja]ma | kitene | ru=/
b. 「抱き枕を抱いて寝る。」
dagimagura_ daide[ne!rù.

/dagimagura= | daidene | ru=/

(アクセント素性は(着)^{-ki&}, (抱)^{-dag&}, (寝)^{-ne&})

この「～て寝る」は補助動詞ではないので

(70) /kite= | neru=, daide= | neru=/

が期待されるが、「着て／抱いて」が「付帯状況」の意味であれば(69)の形で出る^{*47}。mora'w&などと同様に自身の内部の定位置/ne/に核が挿入されている。同様の例をほかにはまだ見出していないので説明しにくい(よってアクセント単位境界の認定なども暫定的)が、補助動詞でないにせよ「着て寝る」「抱いて寝る」がそれぞれある程度一体化してひとまとまりの状況を表すに至っているためにこのアクセント変化が起こるのかもしれない。

3.3.4. 接辞s&の活用とアクセント

接辞s&(丁寧)は、東京方言のmas&に似て特殊な活用をする。筆者の世代はs&を持たないのでアクセントに関しては簡単に調査をしたが、語尾uがつく場合にゆれが認められる。/su/自体の無声化ということもからんで複雑である。結論からいうとs&は+アクセントである。

以下に(書)^{+kag&}, (行)^{-'ij&}へ接続した場合の音調とアクセント解釈を示す。なおこの3.3.4節に限って音声表記に母音無声化も記し、「su」が無声化するときは「su。」と書く。

(71) a. ⁺s&・CV^{*}Cu

kagi[su̥. /kagisu/]

'ij̥i[su̥. /'ij̥isu/]^{*48}

b. ⁺s&・CV^{*}ta

kagisu.[t̥a. /kagisuta/]

'ij̥isu.[t̥a. /'ij̥isuta/]

c. ⁺s&・CV^{*}taq̥ta[˘]

kagisu.[taq̥!t̥a. /kagisuta]q̥ta/

'ij̥isu.[taq̥!t̥a. /'ij̥isuta]q̥ta/

d. ⁺s&・CV^{*}Cuna (丁寧形禁止)

kagi[su!n̥a. /kagisu]na/

^{*47} (70)も許容されなくはないが(69)の方が普通。ただし付帯状況でも「寝る」の方に表現上の焦点が置かれる場合、また、「着て、(それから)寝る」のように「継起」の意味の場合などは(69)は不可で、(70)で出る。

^{*48} (71a)は ka[gi!su̥./kagi]su/, 'i[ij̥!su̥./'ij̥]isu/ にゆれることが時折ある。

'iŋi[su!nà. /'iŋisu]na/

e. +s&•e**N (丁寧形否定; s脱落が普通)

kagi[sèn. /kagise]N/; kagi['èN./kagi'e]N/

'iŋi[sèn. /'iŋise]N/; 'iŋi['èN./'iŋi'e]N/

f. +s&•e**NkaQta (丁寧形否定過去; s脱落が普通)

kagi[seN]kaQ[tà./kagise]NkaQta/; kagi['eN]kaQ[tà./kagi'e]NkaQta/

'iŋi[seN]kaQ[tà./'iŋise]NkaQta/; 'iŋi['eN]kaQ[tà./'iŋi'e]NkaQta/

否定, 否定の過去はそれぞれseN, seNkaQtaとなる。ここからeN, eNkaQtaが語尾として取り出される。この語尾はほかに助動詞gas&に使われる。

(71)の解釈は実現音声からすぐには出てこないものが多いので以下説明する。

3.3.4.1 解釈

もっとも問題がないのは(71c, f)。(71c)はtaQtaの第1核が/su/の無声化により1拍遅れて実現している。語幹の+/-に関わらず核は同じ位置であるから, s&は+アクセントと予想される。

(71a, b, e)は陳述イントネーションを取り除かなければこの解釈に定まらない。そこでsu, suta, seN/'eNのあとに助詞be/peを付けてみると次の通り(↑, ↓は文末イントネーション)。

(72) a. +s&•CV*Cu pe

kagisu, pe ↑.

'iŋisu, pe ↑.

b. +s&•CV*ta be

kagisu, [ta]be ↑. /kagisuta]be/

'iŋisu, [ta]be ↑. /'iŋisuta]be/

c. +s&•e**N pe

kagi[seN]pe ↑. /kagise]Npe/; kagi['eN]pe ↑. /kagi'e]Npe/

'iŋi[seN]pe ↑. /'iŋise]Npe/; 'iŋi['eN]pe ↑. /'iŋi'e]Npe/

(72b, c)は/ta, se('e)/に核があることが分かり, ここから(71b, e)のアクセント解釈が出る^{*49}。(71b)は(71c)と同じく, /su/にくるはずの核が無声化のため/ta/に移動したのである。

(72a)はなお問題である。もし/su/に核がきていれば(71a)が確認されるが, /su/は無声化してしまう(=「弱」)ため核はこない。しかも/pe/に上昇イントネーションがあ

*49 ここまでで(71e, f)の核がともに定まった。後述のgas&の場合も考え合わせて, 潜在核はe**N, e**NkaQtaのように抽出される。

るので末位核か無核か判然としない。そこでさらに助詞kaを付けてみると、

- (73) kagisu[pe]ga ↓. /kagisupe]ga/
'iŋisu[pe]ga ↓. /'iŋisupe]ga/

で、これはpeに核がある。ここから(72a)は末位核

- (74) /kagisupe], 'iŋisupe]/

であったことが分かる。be/peは一般には核を持たないため^{*50}、(74)は/su/にくるはずの核が無声化によってpeに送られたと解釈できる。よつてもとの(71a)も/-su]/と解釈されるのである。

(71d)は簡単には説明がつかないが、s&が+アクセントと仮定し、次のように考える。CV*Cuの第1核が実現すると、その核はs&自身よりも前に出てくる(/-]suna/)ことになってしまう。それを避けるように、核が/su/まで送られるのではないか。

一般に、「語尾」と「その語尾の持つ潜在核」との位置関係については、たとえばuに対するCV*Cuのように、いわば言語の線条性に反して、語尾u自身よりも前の位置に潜在核が設定されることがごく普通にある。一方「アクセント素性を持つ要素」と「そのアクセント素性によって選択・実現される(顕在)核」との位置関係については、核がその要素より前に来ることが許されにくい、といえるのではないか^{*51}。これは一般に成り立っているが、s&のような音形の短いもの以外ではそもそも問題とはならない。潜在核が核位置の候補にすぎないのに対して、アクセント素性は核を決定し発生させる立場であり、発生した核がアクセント素性(を持つ要素)自身より前に来るとは不自然であるためにこのような制限が生まれると考えられる。

3.3.4.2. まとめ

以上から(71)が得られる。s&は+アクセントで、潜在核は音形の短さや/su/の無声化などにより移動して実現する。

*50 たとえば(送)→'ogur&・ul]be/pe(+ka)が付くと

(i) 'ogurube ↑. /'ogurube=/(送ろう。)

(ii) 'ogurube[ga ↓. /'ogurubega]/(送ろうか。)

となる(語形そのものは/'ogu]pe(ga)/の方が普通だが比較の便のため)。be/peが核を持つなら(ii)では/-be]ga/が期待されるが、そうはなっていない。(i)'ogurube ↑. は音調上(72a)kagisu,pe ↑. と同じであるが、末位核ではなく無核なのである。なおkaは/…ka]/で、前が無核の場合のみ核が出る。

*51 これは短い語幹に語尾がついたとき、核が語形の存在する位置まで送られる一般的現象(東京方言で(見)+mi&・CV*CVtaが/mi]ta/となるような)をも含意する。

3.3.5. 存在詞(丁寧形)/助動詞gas&

共通語のゴザイマスにあたる形に「ガス」gas&がある。存在詞'ar&の丁寧形としてのほか、助動詞として使われる。形容詞活用に続くとき、肯定形では語幹に直接付くという特殊性がある。接辞s&と同じように活用し、存在詞は+アクセント、助動詞は-アクセントと分析される(存在詞と助動詞でアクセント素性が異なる理由は今のところ説明がつかない)。

(75) 存在詞として

- a. +gas&・CV*Cu
[ga!sù. /ga]su/
- b. +gas&・e**N (s脱落が普通)
ga[sèN. /gase]N/ ; ga[' èN. /ga' e]N/
- c. xgas&・ta (使わず) → +'ar&・+s&・CV*ta /' arisuta/ を使う。
- d. xgas&・taQta (使わず) → +'ar&・+s&・CV*taQta /' arisuta]Qta/ を使う。
- e. +gas&・e**NkaQta (s脱落が普通)
ga[seN]kaQ[tà. /gase]NkaQta/ ; ga[' eN]kaQ[tà. /ga' e]NkaQta/

(76) 助動詞として——1. 「名詞+コピュラde+gas&」の例

(gas&・u・taQtaはあまり聞かないので外す)

- a. 'amimono] …de] -gas&・CV*Cu
' amimo[no]de ga[sù. /' amimono]de | gasu=/
- b. 'amimono] …de] -gas&・CV*ta
' amimo[no]de gasu[tà. /' amimono]de | gasuta=/
- c. 'amimono] …de] -gas&・e**N
' amimo[no]de ga[sèN. /' amimono]de | gase]N/ ;
" ga[' èN. / " | ga' e]N/
- d. 'amimono] …de] -gas&・e**NkaQta
' amimo[no]de ga[seN]kaQ[tà. /' amimono]de | gase]NkaQta/ ;
" ga[' eN]kaQ[tà. / " | ga' e]NkaQta/

末位核についてはs&と同じく、あとに「be/pe (+ka)」を続けて確認した*52。

形容詞の肯定形に助動詞gas&が付く(「赤いです」などに相当、ただし過去形はgas&の方が過去になるのが普通)ときは語幹に直接付く格好になり、gas&の前でアクセント単位が分かれる。そのままだと形容詞部分のアクセントが実現しないので、語尾i/øに

*52 ただし(76b)に関しては/gasuta]be/となるようにも思う。(77b)(79b)も同様。もしそうだとすれば、「助動詞gas&も存在詞と同じく+アクセント; ただし語尾uのときだけ例外で、/gasu=/という可能性もある。その場合、語尾eN, eNkaQtaの第2核は記述の必要がないことになる。

準じたアクセントを持つ臨時のゼロ語尾「CV^{*}φ」を立てて(77)のように解釈してみた。
 ad hocであり、なお確信は持てない。また末位核についてはやはりs&と同様に「be/pe
 (+ka)」を付けて確認してある。

(77) 助動詞として——2. 形容詞活用に付く場合

(黒)⁺kuro%, (赤)⁻age%

a. ⁺kuro%·CV^{*}φ ⁻gas&·CV^{*}Cu

ku[ro]ga[sù. /kuro] | gasu=/

⁻'age%·CV^{*}φ ⁻gas&·CV^{*}Cu

'agega[sù. /'age= | gasu=/

b. ⁺kuro%·CV^{*}φ ⁻gas&·CV^{*}ta

ku[ro]gasu[tà. /kuro] | gasuta=/

⁻'age%·CV^{*}φ ⁻gas&·CV^{*}ta

'agegasu[tà. /'age= | gasuta=/

c. 否定形は「形容詞語幹・語尾gu 形容詞ne% 助動詞gas&・語尾」である。

例, ⁺kuro%·CV^{*}gu ne%·φ gas&·u → /kuro]gu | nega]su/ (黒くないです)

(____線部は(78a))

(無)⁺ne%, (良)⁺i%は例外的な挙動をとり、これは分析的な記述ができない。一方
 同じ1拍語幹・+アクセントでも(濃)⁺ko%は規則的である。

(78) (無)⁺ne%, (良)⁺i%

a. ne%·φ gas&·u → /nega]su/

ne%·φ gas&·ta → /nega]suta/

b. 'i%·φ gas&·u → /'iga]su/

'i%·φ gas&·ta → /'iga]suta/

(79) (濃)⁺ko%

a. ⁺ko%·CV^{*}φ ⁻gas&·CV^{*}Cu

[ko]ga[sù. /ko] | gasu=/

b. ⁺ko%·CV^{*}φ ⁻gas&·CV^{*}ta

[ko]gasu[tà. /ko] | gasuta=/

3.3.6. まとめ

登米市方言の活用形アクセントをまとめると【表4】の通り。助動詞については3.4節
 で述べる。

【表4】

《語幹》	《接辞》	《語尾》
◇用言本体 +kag&, -tob&, +'ogi&, -'age&, … +kuro%, -'age%, … zaNneN=\$, kire]e\$, gaQko]o\$, …	a'e&(are&), ase&, e&, so'o\$, +mas&, ne%, de%, 'jasu%, nigu%, qar&	CV'Cu, CV'Ce/o, CV'Cuna, CV'Ceba', ne'de, CV'CVsa, CV'CVni, naŋa'ra, CV'ta, CV'taQta', CV'tara', CV'tari, CV'te(→補助用言へ続くときは場 合により第2潜在核もあり), a'e''N, asje''; e''N, e''NkaQta
◇補助用言 (CV'CVte) +ku&, +'ar&, +mi&, +suma'w&, +hosu% (CV'CVte') -'in&, -'i&, -'og& (CV'CVte(mo/'ja/ke/'ida')) -mora'w&, -'jar&, -ke&, -suke&, -idadag&		CV'i/φ, CV'gaQta', CV'gaQta'ra, CV'gaQta'ri, CV'gere'ba, CV'gu, CV'kute; CV'ge'; CV'φ
◇助動詞 'jo]o\$, so]o\$, -gas&, daro]o, de]su, desjo]o, (⇒)+rasu% …ka]mo -sjene%, …ni +cuŋene%		

3.4. 付属語のアクセント

3.4.1. 助詞

助詞のアクセントを見ていく。

なお、助詞同士の接続については残念ながら結論が得られなかったので、議論の対象とはしないことにする。基本的には各々の助詞をそのまま続ければアクセントが得られるが、東京方言のように間に核が挿入されることもないとは言えず、精査が必要となる。

3.4.1.1. 助詞のアクセント

助詞のアクセントを【表5】に掲げる(/ /は略)。用言への接続は活用形に付いても同様。#は共通語的な語彙。

3.4.1.2. 問題点

全体に、2回目以降の下降についての判定がかなり難しい。下降がまったくなくなる(自然下降のみ)ほうが普通と思われるのである。それでもなお「有核に続くときは助詞は無核」とまではいえないと思われる。

さて、従属型で、無核に付くときにだけ核を持つものがある。核位置は多くが付属語末位で、/suka, Qte, Qcu/および/no準体, ka選択, ŋa接, su核, ka疑問/などがそれである。これを/…○○]/のように書く。(80)のとおり、有核の「見る」に付いた場合/suka/の

【表5】

助詞	体言へ	用言へ	助詞	体言へ	用言へ		
kara起点	kara=		ŋa格 共	…ŋa			
kara理由		ka]ra	'o格 共	…'o			
made範囲	made=, ma]de		ni格	…ni			
made期限	ma]de	ma]de	sa方向	…sa			
hodo	hodo=		de手段	…de			
dage程度 共	dage=	dage=	no連体	…no			
dage限定 共	da]ge	da]ge	to格	…to			
ŋure	(⇒)ŋure]	(⇒)ŋurs]	'wa取立	…'wa]			
nara	na]ra	na]ra	mo添加	…mo			
dara接	da]ra	da]ra	to並立	…to			
Ndara接		Nda]ra	to引用		…to		
node		no]de	to報告		…to]		
noni目的		no]ni	no準体		…no]		
noni意外		no]ni	ka選択	…ka]	…ka]		
nado	na]do	na]do	ŋa接 共		…ŋa]		
toga	to]ga	to]ga	su接		…su]		
sa'e共	sa]'e		ka疑問	…ka]	…ka]		
sage	sa]ge		be推量		…be		
'jori	'jo]ri	'jo]ri	na終念押	これらの終助詞は上昇イントネーションが被さるため、アクセントが判定困難			
suka	…suka]	…sika]	ne終				
midε	midε]	midε]	'jo終指示				
naNka	na]Nka		'jo終命令				
naNte	na]Nte		zo終				
Qte	…Qte]	…Qte]	sa終				…sa]
Qcu	…Qcu]	…Qcu]	no終				…no]
daQte強意	da]Qte						
bagari	baga]ri						
baQkari共	baqka]ri						
bari	…bari	…bari					
kedo, keQto		kedo]~ke]do, keqto]					
Qcja終		…Qcja]					
teba終		te]ba					
Qsjo終	Qsjo]						
koQtara接		koQta]ra					

東京方言と対応させれば次の通り：dage=だけ、ŋure=ぐらい、Ndara=のなら、toga=とか、sage=さえ、suka=しか、midε=みたい、bagari・bari=ばかり、kedo・keQto=けど、teba=ってば、koQtara=ならば、su=し。to報告は報告の意の文末表現「～って。」に相当。Qcjaは「よ(下降調) or じゃないか」など、Qsjoは「よ(下降調)」などに相当する終助詞。またno連体は東京方言のように末位核を無核にすることがあるが、そうでないことの方が多く、はっきりしない。

あとの下降は許されない。

(80) /suka/

a. 行くしかなかった

' iŋusu[ka]nega!Qtà. /' iŋu= | suka | nega]Qta/

b. 見るしかなかった

[mi]rusukanega!Qtà. /mi]ru | suka= | nega]Qta/

*[mi]rusuka]nega!Qtà.

これを末位核の自立語/' jama/と比較すると、

(81) a. 行く山(が)なかった

' iŋu' ja[ma]nega!Qtà. /' iŋu= | ' jama | nega]Qta/

b. 見る山なかった

[mi]ru' jama]nega!Qtà. /mi]ru | ' jama | nega]Qta/

こちらは「見る～」においても/' jama/のあとの下降は現れる^{*53}。さらに、

(82) /ka選択/

a. 冬休みか夏休み

hu' ju' jasumi[ga]nazu' jasumi. /hu' ju' jasumiga | nazu' jasumi=/

b. アクセントかイントネーション

[' a]kuseNtoga' iNtoneesjoN. /' a]kuseNtoga | ' iNtonee]sjoN/

*[' a]kuseNtoga]' iNto-

有核の/' a]kuseNto/につづく/ga/はやはり下降せず次に続く。

これは2回目以降の下降が「弱まる」こととは異なる。「弱まる」はあくまで「弱まる」であり、下降が禁止されているわけではないから、下降(核)そのものは存在すると見る。しかし上で述べたようなものは、有核要素に付く場合には下降が禁止されるから、核はないものと見る。

しかし、次のものなどは有核アクセント単位に付いた場合も下降が禁止されるとまでは言えず、微妙である。

(83) /...qcu/

a. 冬休みというもの

hu' ju' jasumiQ[cu]mono. /hu' ju' jasumiQcu | mono]/

b. アクセントというもの

[' a]kuseNtoQcumono. /' a]kuseNtoQcu | mono]/

*53 (80), (81)は「なかった」の前に句切りがある2句をなす方が普通であるが、問題となる核と句の切れ目の位置が重なるので、念のため1句の場合の発音で検討した。これが1句になることはありにくい、「来るしか、ではなく、行くしか」「見る山、ではなく、行く山」のようなつもりである。

[¹a]kuseNtoQcu]mono. も可か (そうだとすれば, 独立型/Qcu)/。

また逆に, 独立型としているものでも, 有核アクセント単位に付いた場合に下降が現れることがあるかどうかが先述の通り微妙である。

東京方言で独立型の有核助詞は, 有核アクセント単位に付いた場合は下降が弱まったり消えたりすることがあるが, 依然として核を持っていると解釈される。それはプロミネンスを置いた音調において

(84) [ネ]コ[マ]デ, ウ[マ][マ]デ

などと下降が現れることが根拠の一つになっていた (川上 稔1966:242-243)。東京方言以外にも, たとえば松江市方言でプロミネンスを根拠として同様の解釈がなされている (上野善道1981.11:114)。

しかし登米市方言ではやや様相を異にする。/sage, 'jori/は/sa]ge, 'jo]ri/と解釈しているが, 有核の「猫」/nego/に接続させてかつ助詞にプロミネンスを置いた

(85) ?ne[go][sa]ge, ?ne[go][¹jo]ri

はやや不自然に感じられる*54。助詞にプロミネンスを置くこと自体それほど多くはないのであるが, それでも東京方言におけるよりも不自然さが大きい。ピッチ変動のみを問題にする限り (「強さ」等は度外視), どれほどプロミネンスを置こうとも

(86) ne[go]sage, ne[go]'jori

と言いたい。とはいえ, 有核アクセント単位に続いたときに「いかなる場合でも下降が許されない」というほどでもなく, 微妙である。

以上, 【表5】はなお確信が持てず, 他の解釈の余地を残すものであることをお断りしておく。

3.4.2. コピュラ

コピュラはアクセント的には助詞と同じ資格である。1拍のもののみ, 前のアクセント単位と融合すると見る。

(87) /...da], da]qta, da]qtara, da]qtari, ...na, ...de], ...ni/

/da, de/が無核に付くときだけ/-da], -de]/となる。

3.4.3. 活用しない助動詞

'joo\$, soo\$はそれぞれ'jo]o\$, so]o\$であるが, 後者は共通語的で, 普通はQcu (トイウに相当) に終助詞'jo, zoなどをつけて/ka]guQcu | zo=/ (書くトイウ+ゾ) などと表す。

*54 無核の「牛」/bego/に接続させ, 同じくプロミネンスを置いた bego [sa]ge, bego [¹jo]ri は特に問題なく容認される (『は大幅な上昇)。

daroo, desu, desjooはそれぞれdaro]o, de]su, desjo]o。これもdaroo, desjooは共通語的で、普通は「(da) be」などで表す。

3.4.4. 活用する助動詞

rasu%は東京方言のrasi%と同じく支配型・独立型の両形があり、

(88) (⇒)⁺rasu%

である。しかしこれも共通語的で、やはりqcuを用いるのが普通である。

カモシレナイに相当するのがkamo-sjene%で、前半は従属型（あるいは独立型/ka]mo/か）、後半はそこから独立した独立型の

(89) …ka]mo | -sjene%

である。moなしで…ka] | -sjene%にも言う。…ka]moのみで文を終止することも可能である。ニチガイナイはni-cujene%で、同じく

(90) …ni | +cujene%

であるが、書き言葉的である。

また可能表現では可能・不可能とも、子音おわり語幹には接辞e&（いわゆる可能動詞）が、母音おわり語幹には接辞are& (a'e&) が用いられるが、これは共通語の影響を受けている。本来は可能には

(91) …ni | +'i% (～するに良い)

を用いる。また不可能には語幹の子音おわり/母音おわりに関わらずa'e&・ne%を用いる。「*～するに良くない」や、子音おわり語幹に対する*a'e&・CV*Cuは用いられない。これら本来の可能・不可能表現は老年層では保たれているがそれより若い層では前述の共通語的なものに移行している。(92a～d)のそれぞれ上段がより方言的な表現。

(92) a. (書)kag&の可能

+kag&・CV*Cu …ni | +'i%・CV*i /ka]guni | 'i]i/
+kag&・e&・CV*Cu /kage]ru/

b. (書)kag&の不可能

+kag&・a'e&・ne%・CV*φ /kaga'ene]/
+kag&・e&・ne%・CV*φ /kagene]/

c. (開)'age&の可能

-'age&・CV*Cu …ni | +'i%・CV*i /'age]ni= | 'i]i/ (runi→Nniとなる)
-'age&・a'e&・CV*Cu /'agera'eru=

d. (開)'age&の不可能

-'age&・a'e&・ne%・CV*φ /'agera'ene=/ (この1通りのみ)

コンピュータの丁寧表現としてdesuのほかかにde gas&があり、

(93) …de] | -gas&

である (deはコピュラ)。gas&のアクセントはすでに述べた。

4. “付属語”アクセントの記述方法 ～先行研究と対照させて

和田実(1969.12=1980.2)の冒頭の文、「助辞接辞はア上の性質がややこしい。」^{*55}に象徴されるように、活用形・付属語はアクセント上複雑な振る舞いをする。その記述方法を提案することが本稿の目的であった。付属語アクセントが自立語(用言はその“終止形”をひとまず想定して)と決定的に異なるのは「前接語との関係が無視できない」という点であり、それをどう整理し記述するかが課題なのであった。

本節では、ここまで述べた活用形アクセント・付属語アクセントについて、先行研究とも対照させながら本稿の立ち位置を明らかにする。

といっても、活用形を含む“付属語”アクセント全体の研究史については田中宣廣(2005.10:53-78)が網羅的でかつ詳しいのでそちらにゆずる。本節ではその中で、本稿の「接続型」に類似する概念を扱った論考を主に取り上げる。

諸方言のアクセントの分類は上野善道(1989.5:179)に従う。「有アクセント方言」「多型/N型アクセント」は同論考の定義による^{*56}。

筆者は

- (94) “付属語”アクセントは自立語アクセントとの一貫性(したがって当該方言のアクセント体系全体としての一貫性)のある記述をせねばならない

と考える。そのために、方法論的仮説として次を提示する。

- (95) a. 活用形アクセントと付属語アクセントを区別する。
b. 活用形アクセントは1アクセント単位内のアクセントがどう決まるかを記述するものである。付属語アクセントは、付属語内部のアクセントと「接続型」とからなる。接続型は大きく「独立型/非独立型」に2大別される。

この背後には次の考え方がある。

- (96) 付属語アクセント記述においても、有アクセント方言の定義上「アクセント単位」という概念を踏まえなければならない。このことが(94)を満たすために必要である。

(95)は有アクセント方言すべてを射程に収めることを想定しているが、式特徴を持つ方言やN型アクセント方言を本格的に論じることは筆者の手に余る。また「昇り核」「上げ核」方言についても未検証である。よって「仮説」と位置づけるものである。第4節

*55 「ア」=アクセント。

*56 「有アクセント」とは、「アクセント単位」(事実上単語ないし文節)ごとに一定した、主として音調上の特徴が見出されるタイプを言う」(p.180)。

で取り上げるのは下げ核を持つ方言を中心とする。なぜ高々「下げ核・式なし」の方言の議論から仮定される方法に有アクセント方言一般への適用可能性を見るかといえ、もっとも記述が厄介なのが式を持たない多型アクセント方言であろうからである。4.3節で後述。

4.1. 「接続型」に関する先行研究と論点

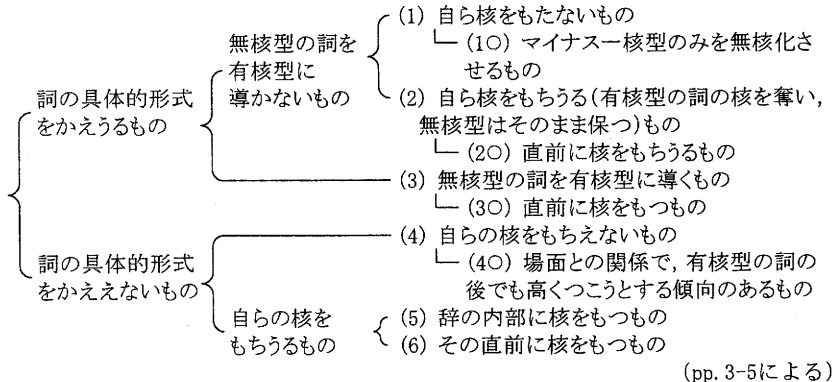
“付属語”アクセントにおいて「前の語との関係」を重視する研究はこれまでも多くあった。その定義は一見 論者間の異同は小さいように見えるが、実は本質的な違いを含んでいる。第4節では便宜上、各論者の立てる「前の語との関係」の類別をすべて「接続型」と呼ぶことにし、以下、主要な先行研究について述べる。ちなみに本稿とちがって活用形をも「接続型」で説明する論考がある（ラレルは〇〇型、など）。

4.1節で扱うのは式を持たない多型アクセントの論考を中心とする。他のタイプの方言については4.3節で言及する。

4.1.1. 奥村三雄(1956.9)

奥村三雄(1956.9)は、「付属語においては、《そのアクセント形式がその語性職能を反映している》という可能性が極めて大きい」(p.2)とし、東京方言と京都方言の付属語アクセントをそれぞれ体系化し、方言間での対応を考える。橋本文法に則り、活用形を含めた“付属語”(「辞」とも)を「《その前にある詞の形式との関係》及び、《その辞自らの形式》」(p.5)の2点から分類している。たとえば東京方言では次のようである。

(97)



4.1.2. 榎垣実(1963.3)

京都市方言の、活用語・派生語・複合語・文節・連文節というそれぞれのレベルにお

ける音調の法則について述べられている。活用形を含めた“付属語”のほか、接尾語なども一括して扱う。なお、「高平・低平」は「高起式無核・低起式無核」の意。

- (98) 「融合型」：上の語の型に融合して、全然影響を及ぼさない。そして、上の語が高平型であれば接尾辞も高平型になり、上の語が低平型であれば接尾辞も低平型になって最終拍に核を持つ。

「添着型」：どの語についても、いつも低平型。

「融着型」：付属語の一部分だけが名詞に融合同化し、あとの部分が低く平らに続く。

「吸着型」：高起式の名詞に接続すると、尾低型の名詞をも高平型にしてしまうし、低起式の名詞に接続すると中高型の名詞をも低平型にしてしまう。

(pp. 41-52)

4.1.3. 和田実(1969.12, 1971.10, 1984.2)

和田実(1969.12=1980.2)は、「東京アクセントにおける辞(助詞、助動詞、接辞、造語成分のたぐい)を、整理分類し、〈直接的な記号〉であらわす」(p.145)ことを主眼とする。

- (99) 甲類 独立する辞 —— ①, ②, ③, @
乙類 従属する辞 —— (順), (低), (特の)
丙類 融合する辞 —— (前), (一), (二), (三), (無), (特保), (特転)
(pp.156-157による; 丸囲みの「0・一・二・三」を@・(一)・(二)・(三)に変えた)

- (100) 甲類では、自立語と辞とがそれぞれ一ア単位で、あわせて二ア単位になる。
[...]

乙類丙類では、辞(助詞・助動詞のほか、接辞・造語成分のたぐい)をも含めて、かりに辞と呼ぶが自立語にくっついて、あわせて一ア単位になる。

(p.157)

(100)から、(99)はアクセント単位を基準とした分類であることが分かる。甲・乙・丙類は本稿の独立・従属・支配型にほぼ相当する。

和田(1971.10)は辞書のアクセント記号の様式をまとめたものであるが、第七節で同様の案を提出している。和田(1984.2)は神戸のアクセント(下げ核・式あり)についての論考で、やはり同じ分類によって活用形と付属語について述べている。下位分類など、東京と多少違う点がある。

4.1.4. 木部暢子(1980.11, 1982.9, 1983.9)

木部暢子(1980.11)は北九州方言(下げ核・式なし)の活用形と付属語を奥村(1956.9)

の分類基準を利用して次のように分類する。

(101) 助動詞

(1) 詞の式を変えうるもの (有核型の無核化)

(a) 平板式の詞に付いて自ら核を持ちえないもの, (b) 平板式の詞に付いて自ら核を持つもの

(2) 詞の式を変えないもの (有核型を無核化しない)

(c) 自ら核を持ちえないもの, (b) 自らその内部に核を持つもの, (e) 辞の直前に核を持つもの

助詞

(1) 詞の式を変えうるもの (有核型の無核化)

(aO) 辞自ら核を持たないもの, (b) 辞自ら核を持つもの

(2) 詞の式を変えないもの

(c) 自ら核を持ちえないもの, (cO) cのうち時として高接し, 卓立型をつくるもの, (d) 自ら辞の内部に核を持つもの, (e) 辞の直前に核を持つもの

(pp. 46-51による; 改行位置変更; 助動詞で(2)の(b)とあるのは(d)の誤りか)

木部(1982.9)は木部前掲論文の(a)~(e)を「接尾辞式・従属式・低接式」にまとめなおす。これは東京方言にも適用される。

木部(1983.9)は、東京方言の活用形・付属語について次のように分類する。

(102) 「複語尾式」: 独立しない形に続いて語形変化のあるもの

「接尾辞式」: 独立しない形に続いて語形変化のないもの

「助動詞式」: 独立する形に続いて語形変化のあるもの

「付属語式」: 独立する形に続いて語形変化のないもの

ここからさらに、語形変化(活用)をするかどうか、するならば活用の形、アクセントは前接語が決めるか付属語が決めるか、核を持つかどうかで分類される。

4.1.5. 川上夔(1966, 1973.3)

川上は「連接型」を他の論者ほど明確に規定しているわけではないが、それに相当することが述べられている箇所がある。

川上夔(1966)は2.3.3.2節でふれたとおり、東京方言では原則として1モーラ助詞は「従属型」相当, 2モーラ以上の助詞は「独立型」相当とみる。

川上夔(1973.3)は

(103) アクセントの面から見ると、付属語には

(1) 自立語を支配するもの (2) 自分のアクセントをもつもの (3) 積極的なアクセントをもたないもの

の三種類がある。

(p. 36; 改行位置変更)

(104) (3)に属する付属語は、みな一拍の語である。(p. 39)
と述べる。この(1)～(3)は本稿の支配・独立・従属型に相当すると考えられ、それぞれ「ぐらい」、「まで」、「に」などが挙例されている。活用形は含まず、本稿でいう「付属語」のみに適用されているようである。

4.1.6. 上野善道(1981.11, 1992.10)

上野善道(1981.11)は松江市方言(下げ核・式なし)で「従属型・独立型・支配型」を規定している。独立型は「自立語が続くときと全く同じで […] アクセント上独立する」、従属型は「全体として一単位」とあり、アクセント単位を基準とした分類である(pp. 116-117)。適用の範囲については「いわゆる助詞と助動詞のうち分離性の比較的強いもの」(p. 113)とあり、挙例を見ると概略 本稿における「付属語」相当の語という意味と推定される。なお型の判定にこの方言の上昇位置に関する規則(p. 110ff.)の観察が利用されている。

上野善道(1992.10)は島根県見島方言(下げ核・式なし)でやはり「従属型・独立型・支配型」を立てる。従属型は「名詞+付属語でアクセント的に1単位」とある(以上, pp. 159-161)。適用範囲は助詞とコピュラである。

4.1.7. 田中宣廣(2005.10)

田中宣廣(2005.10)は、信州大町方言(下げ核・式なし)・東京方言・京都方言・鹿児島方言(2型)・陸中宮古方言(昇り核・式なし)について、接続型(付属語の「式」と呼ばれる)と付属語内部のアクセントとによって付属語内部のアクセントを記述する(p. 91-117)。適用範囲は活用形をも含む。

(105) 「付属語のアクセント」とはすべての付属語で統一的に
第1観察点：前の語からの音の高低関係上の続き方(付属語アクセントの「式」)
第2観察点：付属語内部のアクセント(どこで音調の下降が生ずるかなど)
という2段階の観察をしなければならない。(p. 95)

(106) 「従接式」：前接自立語にそのまま続く。付属語には下がって続くことがある。
「声調式」：前接自立語の声調が及ぶ。
「独立式」：前接語からアクセント上独立する。
「下接式」：前接自立語が平板型なら下がって続き、起伏型なら下がらず続く。
「支配式」：前接語のアクセントに関わりなく、自身の型に引きつけてしまう。
「共下式」^{ともさげ}：その付属語の1拍前から下がる。

(p. 96; また、これらのうち2種が連続する「複合式」がある)

どの式があるかは方言によって異なる。付属語内部に関しては、信州大町・東京・京都・陸中宮古方言は核で、鹿児島方言の独立式はA/B型で記述する。

本節で取り上げた奥村・楳垣・木部・上野の各論考における接続型相当のタイプ分けが、田中のいう「式」に相当するとする (p. 96)。しかし4.2節で述べるようにこれらの論者の立場は大きく2つに分かれる。

田中論文は付属語アクセントを本格的に扱った論考である。付属語アクセント記述に必要な種々の概念が明確に定義され、踏み込んだ記述がされているが、それだけに問題点もいくつかある。

4.1.7.1. 接続型における下降の直接的記述は妥当か

多型アクセントの分析において、田中説のみ特異な点がある。下降を核以外で記述する部分がある点である。

各論者の接続型の規定を見ると、奥村・木部は核で記述していた。和田・川上・上野(および本稿)はそもそも接続型の規定に核のことを盛り込まない。和田の低位分類(付属語専用)に立てられた諸記号)も基本的に核から離れない。

それに対して田中の「下接式」「共下式」は、「下がって続く」あるいは「“付属語”の1拍前から下がる」ことを、(下げ)核とは区別する。これには疑義がある。この下降は核によるものであると本稿の筆者は考える。

共下式についてはひとまず論評を控える。「下接式」を「“付属語”頭に核のあるもの」と区別する理由として次の2点が述べられる(田中は核のことを「さがりめ」と呼ぶ)。

(107) ①方法論上の統一性

[...] 前の語との接続点の音調特徴を、その語の「前の語からの音の相対的高低関係上の続き方」として捉えるべきである。よって、下がって付いていればそこに『下接』という特徴が導き出されることになる。

②『さがりめ』との区別

[...] 第2観察点を「付属語内部のアクセント」としたが、その「内部」にある『さがりめ』を「下接式」の下がって付く性質とは区別するからである。それは方法論上の意味もあって①のとおりであるが、中には「下接式」であって内部に『さがりめ』のある付属語)があるからで、そのような例において、付属語アクセントの「式」と内部の『さがりめ』を形式上も明確に峻別しておく必要が方法論上あって、また「式」と「さがりめ」は、「下接式」以外の「式」でのことまでも勘案するとはっきり区別した方が分かりやすい。その例は京都方言の名詞に付く/([⌢])baqka]ri/である。[...] (p. 113; 記号は変更; 「式」の記号は頭文字をとって([⌢])などに置き換える)

しかしながら①②とも「下接式」が核でないことの理由にはなっていない(/([⌢])baqka]ri/

の例については後述)。

東京方言において「山なら」「行くなら」は

- (108) ヤ[マ]ナラ
イ[ク]ナラ (ナラが ~ナ]ラ かどうかはいまは問題外)

であるが、田中に従えば名詞に続くナラは従接式/^(従)na]ra/, 動詞に続くナラは下接式/^(下)nara/であるから

- (109) 「山なら」は/'jama]na]ra/
「行くなら」は/'iku^(下)nara/

と書くことになる。/nara/内部の下降の有無はいま問題外として、/'jama/のあとの下降は核(名詞本来の)であるが、/'iku/のあとの下降は核でないとされるため/'iku]nara/とはできず、このように書かざるを得ない。しかし、それでよいのだろうか。田中の「下接式」「共下式」以外の式(=連接型)、そして他の論者の立てる全ての連接型は、具体的な核の配置によって解消されるものであるが、この「下接式」の下降は核ではないからそのまま「下接式による下降」として残らざるを得ないわけである。

東京方言は、自立語単体であっても付属語が加わっていても、アクセント記述は基本的に核のみでできる。このことは他の論者が下降をすべて核で記述していることから分かる。それにもかかわらず下降の説明に核以外の要素を持ち込むためには、(107)は説得力に欠ける。加えて、田中の挙げる5方言を見渡すと(pp. 270-276, 312-316, 342-345, 363-366, 411-415)、次のことが分かる。

- (110) 「下接式」が存在するとされるのは信州大町・東京・京都方言であるが、これらはいずれも下げ核を持つ方言であり；
一方 下げ核を持たない陸中宮古方言(昇り核)・鹿児島方言(2型アクセント)には下接式もない。

これもこの下降が(下げ)核である可能性を示唆する*57。

なお、京都方言の/^(下)baQka]ri/に関しては、本稿でいう独立型で低起式の/LbaQka]ri/と見られる。始点の下がりには低起という式特徴によるものである。田中は/baQkari/の内部には漸昇調があることを述べている(p. 329)。しかし「下接式」の規定に漸昇調は含まれていない。漸昇調はまさに/baQkari/が低起式であることを支持する事実であり、これをただ「下接式」と処理することについて田中が何も述べていないのは不思議である*58。筆者は付属語でも独立型であれば(高起/低起の)式特徴を持つと考える。

*57 ちなみに田中の挙げる5方言の中で「下接式」でかつ内部に下降のあるものは京都方言の/baQkari/のみである。

*58 田中は京都方言では“付属語”に高起/低起式を認めない。これに関して、木部暢子(2009. 1:70ff.)も参照。

共下式については語尾における潜在核で解決できそうである。たとえば/(*)heN/は屋名池(1992. 6:49)によればCV*CVheNという語尾である。

4.1.7.2. アクセント的な積極性・消極性

田中宣廣(2005. 10)は川上葵(1973. 3:36)の3分類(103)について次のように述べる。

(111) アクセント節の各構成要素のアクセントと実現音調との関係の正しい理解をするためには、あたかもアクセントの力の大きさに差があるように、「この語は積極的だが、あの語は自らのアクセントをもたない」とはしないで、前接語からの続き方の『力』はどの種類も同じであって、その『内容』に違いがあると捉えるのが、方法論上正当である。自立語のアクセントでは積極的か否かということの問題にすることはないので、付属語でだけ問題にする合理的理由はない。

[...]「-ŋa」や「-kara」のように自立語のアクセントが実現音調となる付属語は、その付属語には積極的なアクセントの力がないのではなく、そのアクセント節の実現音調の中で自立語のアクセント型をそのまま実現させるという『内容』のアクセントを立派に備えていると考えるべきである。

(p. 100; 下線は原文)

本稿は「積極的/消極的」というとらえ方を支持する立場である。

「[積極的か否かを] 付属語でだけ問題にする合理的理由」はある。自立語と違って付属語は必ず何らかの語に先立たれる形で存在するのだから、前接語のアクセントを生かし、自身はアクセント上透明であるというあり方が可能であり、実際に存在する。これを「積極的でない」と表現する^{*59}のは、「自立語のアクセント型をそのまま実現させる」という いわば虚なる「内容」を認めるよりも素直な解釈であると考えがどうか。

田中は「どの付属語も、アクセントに関して等し並に扱う」という方針をとることを言いたいだけなのかもしれない。一方 川上や本稿の考え方は、そもそも等し並には扱わない。非独立型で、「積極的でない」のが従属型、付属語側がアクセントの決定権をもつのが支配型、というふうに「アクセントの決定権がどちらにあるか」を見ているのであり、「力」の差こそ重要であるという考え方である。このように考えるならば「積極的なアクセントを持たない」というのは合理的である。

本稿では接辞の多くも自らのアクセントを持たないとするが、やはりそれも同じこと

*59 あるいは次のようにも言える：従属型はアクセント的には「前接アクセント単位の長さを延長するだけ」の働きしかもたない。「山」/jama/に「が」/…ŋa/が付くとき、「が」は2拍のアクセント単位/'jama/を3拍の/'jamaŋa/にするだけである。

である。

4.2. 本稿で提示する仮説

仮説(95)と、その背後にある(96)について述べる。

4.2.1. 「アクセント単位」とアクセント記述

(96) 付属語アクセント記述においても、有アクセント方言の定義上「アクセント単位」という概念を踏まえなければならない。このことが(94)を満たすために必要である。

奥村・榎垣・木部・田中は「アクセント単位」を用いておらず（接続型の定義のみならず、議論の中にそもそも出てこない）、一方 和田・川上・上野は「アクセント単位」を接続型の類別に用いている。この違いは見えにくいだが、前4者と後3者が決定的に立場を異にしていることを意味する。

上野善道(1989.5:179)の規定は次の一般則として整理できる。

(112) 《有アクセント方言における一般則》

任意の語連続はいくつかのアクセント単位からなり；
アクセント単位ごとにアクセント的特徴（核，式，音調型）が定まっている。

(112)は、活用形・付属語が含まれる場合でも維持されるべきであり、したがって活用形・付属語の記述はアクセント単位（の境界）を意識したものでなければならない。

4.2.2. 活用形アクセントと付属語アクセント

(95a) 活用形アクセントと付属語アクセントを区別する。

川上・上野は、少なくとも前掲各論考を見る限りでは接続型の議論に活用形を入れていないようである。他の論者は活用形をも接続型で説明しようとする、つまり、1つの記述法で全てを説明する。記述そのものは後者の立場でもできないわけではないが、本稿は前者の立場をとり、それをより明確化しようとするものである。

まず、拠って立つところの文法理論は学校文法よりも第1節で概観した屋名池の理論の方が合理的と考えられる。学校文法との大きな違いとして、“終止形”語尾としてuを分析することが挙げられるが、これはアクセントの観点からは、たとえば東京方言で次のような共通性を見ることに役立つ。

(113) 起伏式 (+アクセント)	平板式 (-アクセント)
mirare]ru	kikareru=
kakare]ru	ka'wareru=
'okirare]ru	'aterareru=
tatakare]ru ;	'okurareru= ;

misase]ru
kakase]ru
'okisase]ru
tatakase]ru
…

kisaseru=
ka'waseru=
'atesaseru=
'okuraseru=
…

(/ /は略)

学校文法によるならば、ここから抽出されるのは

(114) 起伏式：/-rare]ru, -sase]ru, …/ 平板式：/-rareru=, -saseru=, …/
云々といった，“助動詞”ごとのアクセントの共通性である。しかしここで語尾uを抽出すれば、用言単体の“終止形”/mi]ru, ka]ku, …; kiku=, ka'u=, …/をも含めて「CV*Cu」というより大きな共通性を抽出できる。

そして、分析をこのようにするならば、活用形アクセントの分析と付属語アクセントの分析は自ずと別扱いとせねばならない。活用形アクセントは「語」未満の要素（語幹・接辞・語尾）の結合に関わるものである一方、付属語アクセントは語と語の接続に関わるのだからそもそもレベルが異なるわけである*60。

このようにして区別された2つのアクセント規則は、アクセント単位の構成に関しても立場が異なる。

(95b) 活用形アクセントは1アクセント単位内のアクセントがどう決まるかを記述するものである。付属語アクセントは、付属語内部のアクセントと「接続型」とからなる。接続型は大きく「独立型/非独立型」に2大別される。

一般に、あるアクセント単位に対して別の語形が接続するとき、アクセント的なあり方としては独立/非独立という2種しか通常ありえず、これが「接続型」の根本的な2種である。ただし1.2.3節で挙げたような「アクセント単位境界が「語」の境界とずれる」ものについては「特殊型」などとして扱わねばならないが、数は多くない。

darooのようなものははじめから定位置の核/daro]o/を持っているが、活用する付属語では、それに相当する核が活用形アクセントによって決まる。そして、たとえば東京方言のrasi%は支配型であり、活用形アクセントによって決まったこの核でもって前接アクセント単位を支配する。活用する付属語はこうした2段構えの記述が必要である。

*60 純粋にアクセント的に見ても、接辞や語尾は「1アクセント単位未満の要素（語幹あるいは語幹+接辞）」に付くものであるのに対し、付属語は「いったんできあがっている1つのアクセント単位」に付くという違いがある。

ところで、活用形と付属語という異なるレベル間にある種の共通性があることも事実である。すなわち、アクセント素性をもつ接辞+mas&や+gar&は、それまでに出てきたアクセント素性を打ち消す働きがあり、付属語の「支配型」と共通する面がある。またアクセント素性を持たない接辞are&やase&は、付属語で原則としてアクセントを持たない「従属型」と共通する面がある。このような点を重視して“付属語”を統一的に記述する方法があるかどうかは興味のあるところである。

4.2.3. まとめ

活用形アクセントは1アクセント単位内のアクセントがどのように形成されるかという規則であり、付属語アクセントは「接続型」によりアクセント単位の構成の仕方を記述する。「アクセント素性」「潜在核」「接続型」といった記述装置は活用形や付属語専用にあつらえられてはいるが、活用形・付属語が自立語とは異なる独自の世界を持っていることを意味するのではなく、むしろ逆である。それらは最終的に「アクセント単位と、それに対して定まっているアクセント核」へ解消され、よって、一般則(112)は活用形・付属語が関係しても維持される。活用形アクセント・付属語アクセントの分析はここにおいて(94)「自立語アクセントとの一貫性」をみることができるのである。

4.3. 他の方言への適用

本稿で取り上げたのは「式を持たない下げ核」方言が中心であったが、導かれた仮説は有アクセント方言一般に適用できる可能性を持つ。

“付属語”アクセントの記述は「式を持たない多型アクセント」方言において最も複雑ではないかと思われる。かかる方言では「アクセント素性(と本稿で呼ぶもの)の実現のしかたが語尾によって異なる」(つまり、2つの潜在核が語尾ごとに固有)からである。ところが、たとえば京阪方言では、アクセント素性が単体で低起/高起式に反映し、語尾とは関わらない(語尾はそれぞれ固有の \vee をもつが、1つだけで、それがそのまま核となる: 屋名池1992. 6:47ff.)。鹿児島2型アクセントではアクセント素性は単体でB/A型として実現し、あとはアクセント単位の境界位置さえわかればアクセントが決まってしまう。

京阪方言は屋名池(1992. 6)で記述されているので、ここではN型アクセントの一例として鹿児島方言を見よう。鹿児島方言の“助詞・助動詞”は、木部暢子(1989. 5=2000. 2:41)によれば次のように分類される。

(115) (I)アクセントを持たないもの(従属式)

(ラ)スック<使役>, (ラ)ルック<受身>, ン<打消>, タ<過去>, バ<仮定>, ガ<が>, オ<を>, ズイ<まで>, セカ<さえ>, バッカイ<ばかり>, ……

(II)アクセントを持つもの(独立式)

A型 ト<準体助詞>, チョック<進行態・既然態>

B型 ジャ・ジャライ<指定>, ジャロ・ジャロダイ<推量>, ……

X型 ド<伝達>, ガ<伝達>, ……

(III)特殊型

ゴチャック<様態>

(p. 41より抜粋)

(II)は「そこでアクセント単位が区切れ、新たなアクセント単位を立ち上げる助詞・助

動詞」(p. 40), それに対して(I)は「自身がアクセントを持たずにまったく前接語に従う助詞・助動詞」(同)とされる。特殊型のゴチャットはすでに述べた(1.2.3節)。X型はイントネーションが強く関与するためにアクセントを定めがたい語類(p. 47)である。また前接語を後ろからアクセント的に支配する「支配型」相当の語はない。

鹿児島方言のアクセントを記述するには、アクセント単位の境界位置と、それぞれの単位がA型・B型のいずれであるかが分かれば必要十分である。(115)によればそれが分かるので、鹿児島方言の“付属語”アクセント記述は基本的に(115)で必要十分である。田中(2005. 10:348-369)も同じ方法をとる(ただし従属式は「声調式」との位置づけ)。

これはここまで述べてきた本稿の枠組みの中で記述が可能である。(II)が独立型付属語に、(I)が接辞・語尾と従属型付属語に入る。用言のアクセント素性は+/-がそのままB/A型になり、接辞と語尾はアクセントをまったく持たない、とすればよい。

以上を簡単に比較すると次のようになる。

(116)

	活用形アクセント		付属語アクセントの接続型
	アクセント素性の語尾への関与	語尾のもつアクセント的特徴	
東京方言・登米市方言	あり：語尾の潜在核を選択	潜在核(2つ)	独立／従属／支配
京阪方言	なし：単独でアが実現(低起/高起式)	核(1つ)	独立／従属／支配
鹿児島方言	なし：単独でアが実現(B/A型)	なし	独立／従属

(A=アクセント)

4.4. まとめ

“付属語”のアクセント分析では「前の語からの続き方」という視点を持つことが有効であり、そのように分析した研究が多くある。しかしながらそれは論者によって少しずつ規定が異なる。本稿は、活用形と付属語を別扱いとして記述するようにし、「前の語からの続き方」=「接続型」は後者に対して適用した。

たとえば東京方言の活用形・付属語アクセントは

活用形に対しては、語幹・接辞について「アクセント素性」を、語尾について2つの「潜在核」を；

付属語に対しては、「接続型」とそれに応じたアクセント核を

指定する。ここで設定した「アクセント素性」「潜在核」「接続型」は「アクセント単位の構成」および「それぞれの単位内における核の配置」に解消され、最終的には「アクセント単位ごとに1個または0個の核」という、自立語と一貫した形に記述することができる。またこの枠組みは他の方言に対しても記述力をもつと考えられる。

おわりに

“付属語”のアクセントは把握しにくく、さまざまな記述法が提出されてきた。本稿は活用形については屋名池誠の述部のアクセント記述に注目し、一方 付属語はそれとはレベルが異なるものとして、独立型／非独立型という2種を基本にした類別を考えた。最終的に、一方言のアクセント体系として一貫した形になることを目指した。

第3節では登米市方言の記述を試みた。活用形アクセントは、この方法論を採用するならば、当該方言の活用体系を記述できた上で語らなければならない。今回登米市方言の活用体系については十分詰めることができず、動詞末尾の/ru/が後続の音形によって/N, Q/に変化することや、変格活用の動詞についてはふれることができなかった。これは反省すべき点である。

東京方言でも登米市方言でも「2回目以降の下降」は判定しにくい。“付属語”アクセント記述の最終的な問題はそこにあるのではないか。研究の進展が待たれる。

【補記1】

佐藤奏(2008.3)ではアクセントを音節単位で記述したが、早田輝洋(1999.2)および上野善道(2001.3)に従いモーラを認める。

- (i) 日本語には、東北諸方言も鹿児島方言も含めて、すべてその区別が有ると考えられる。[…]長音節を2と数え、短音節を1と数える単位をモーラという(早田輝洋1999.2:7)
- (ii) a. [モーラの定義]軽音節と重音節の音韻的区別があれば、その言語は「モーラ」をもつとして、そこに「1対2」の関係も「等時性」も要求しない
b. 日本語東北方言も、軽音節と重音節の対立はあるので、[…]非等時的モーラをもつ(上野善道2001.3:14)

/ε/を何モーラとするかなど、多少問題があるが、これについて詳しく検討することは趣旨から外れるので避けた。本稿ではアクセント核を担う単位を「拍」と呼んだ。

【補記2】

佐藤奏(2008.3)の「語頭核制限」=(i)を撤回する。

- (i) 原則：2音節以上では、語頭の軽音節は核を担えない。
例外1：2音節語は/軽]軽/が存在する。
例外2：語頭が軽音節であっても、続く第2音節が無声化母音を持つ場合は事実

上の重音節となり、/軽]無○(…)/の形で語頭核が許容される。(p.149)

上記のような規定であったが、反例、すなわち

(ii) /○]◎…/ (○=モーラ, ◎=非モーラ音素かつ非無声化音)

がいくつか見つかったので挙げる。佐藤(2008.3)「注11」で「^{うるこめ}糲米」/u]rukome/の例があったことを述べたが、その後次が見つかった。

(iii) さておき/sa]te'ogi/, 次々/cu]ŋicuŋi/, 五時間/go]zukaŋ/,
(敵も)然る者/sa]rumono/*⁶¹

(上野善道1987.3, 1988.3の語彙リストによる; 網羅的に調べたわけではない)

また上野(1985.2:54-55)に岩手県粟石方言の3・4モーラ名詞で頭高型のものが列挙されている。この方言は/○狭広/(狭=狭母音, 広=広母音)の「狭」に核が来ないことが関係して頭高型が多く出る。登米市方言ではそのような制限がないが、それでもリストの中で(ii)に該当するものとして少なくとも(iv)がある。ただし並列的な構造(次々, 猿蟹, 鶴亀, 読み書き)や複合語というほど熟していないもの(五時間, 然る者, 間もなく)ばかりではあるが, あることはあるわけである。

(iv) 猿蟹/sa]rukani/, 鶴亀/cu]rukame/, 読み書き/'jo]mikagi/,
間もなく/ma]monagu/;
酔の物(これは前稿でもふれた)/su]nomono/, 菜の花/na]nohana/,
火の玉/hi]notama/

前稿の副題の「南奥特殊アクセント」は頭高型が極めて少ないことをもって用いたものであるが, あわせてこれも撤回する。

(追記)

3.3.3節で述べた登米市方言の「動詞+te+補助動詞」のアクセントについて, 【表3】のII領域の下半分は, IV領域bに準ずる次のようなアクセントの可能性もあり, どちらか判然としない。筆者は特にteのあとで一瞬ポーズを置くところから出ることがある。

/naŋe]demo]ra'u, naŋe]de'ja]ru, naŋe]deke]ru, naŋe]desuke]ru,
naŋe]de'ida]dagu/

もしそうであれば解釈の変更が必要になるが, たとえば活用させた結果想定される/nəŋe]de'ida]daida]qta]/は, 理論上3アクセント単位とせねばならない。現実の音声では2回目以降の下降のはっきり出ず検証困難である。よって判断を保留せざるを得ない。

*61 感動詞も含めればさらに さてさて/sa]tesate/, これこれ/ko]rekore/, しめしめ/si]mesime/がある。

また「-V1+te+⁺suma'w&」について、/su/に核を置くIV領域b相当の発音を耳にしたことがあり(たとえば(履)/haidesu]ma'u/)、【表3】で挙げたものと併用されているかもしれない。

【引用・参考文献】

- 榎垣 実(1963.3)「音調差異とその法則 一京都市方言を例として一」、『国語研究』15:17-65
- 上野善道(1977.8)「日本語のアクセント」, 大野晋・柴田武(編)『岩波講座日本語5 音韻』岩波書店:281-321
- 上野善道(1980.7)「アクセントの構造」, 柴田武(編)『講座言語1 言語の構造』大修館書店:85-134(上野善道1984.10:265注1に誤植訂正)
- 上野善道(1981.11)「松江市方言のアクセント 一付属語を中心に一」、『日本海域研究所報告』13:109-136
- 上野善道・新田哲夫(1983.10)「金沢方言におけるアクセントと語音の関係」、『日本海文化』10:左1-43
- 上野善道(1985.2)「地方アクセント研究のために」, 加藤正信(編)『新しい方言研究 愛蔵版』至文堂:47-64
- 上野善道(1986.3)「青森市方言の動詞のアクセント」、『日本海文化』13:1-51
- 上野善道(1987.3)「アクセント調査語彙用参考資料 一4モーラ体言改訂版(1)一」、『アジア・アフリカ文法研究』15:233-39
- 上野善道(1988.3)「アクセント調査語彙用参考資料 一4モーラ体言改訂版(2)一」、『アジア・アフリカ文法研究』16:99-247
- 上野善道(1989.5)「日本語のアクセント」, 杉藤美代子(編)『講座日本語と日本語教育2 日本語の音声・音韻(上)』明治書院:178-205
- 上野善道(1992.10)「見島方言の付属語のアクセント」、『日本海域研究所報告』24:157-167
- 上野善道(2001.3)「日本語のモーラ, ラテン語のモーラ, 英語のモーラ」、『国語研究』64:8-16
- 上野善道(2001.10)「鹿児島県黒島大里方言の活用形アクセント」、『言語と人間』5:5-31 = 上野善道(2002.3)『消滅の危機に瀕したアクセントの緊急調査(「環太平洋の言語」成果報告書A4-006)』大阪学院大学情報学部:94-134に収録
- 上野善道(2002.1)「アクセント記述の方法」, 飛田良文・佐藤武義(編)『現代日本語講座3 発音』明治書院:163-186
- 上野善道(2003.6)「アクセントの体系と仕組み」, 北原保雄(監修)・上野善道(編)『朝倉日本語講座3 音声・音韻』朝倉書店:61-84
- 大西拓一郎(1990.3)「宮城県志津川町方言の用言のアクセント 一動詞の変化形を中心に一」、『日本文化研究所研究報告』別巻27:82-57
- 奥村三雄(1956.9)「辞の形態論的性格」、『国語国文』25/9:1-14
- 川上 泰(1961.5)「言葉の切れ目と音調」、『國學院雑誌』62/5:67-75 = 川上泰(2005.2):130-142に収

録

- 川上 蔡(1966)「体言につく一拍の助詞のアクセント」、『音声の研究』12:239-253
- 川上 蔡(1973.3)『音声学シリーズ5 日本語アクセント法』学書房出版
- 川上 蔡(1977.12)「アクセント単位の大きさ、強さ」、『国語学』111:78-82 =川上蔡(2005.2):346-354
に収録
- 川上 蔡(2000.9)「具体音声から抽象されるもの」、『国語と国文学』77/9:1-14
- 川上 蔡(2005.2<1995.3)『日本語アクセント論集(第3版)』汲古書院
- 木部暢子(1980.11)「北九州方言のアクセント —助詞・助動詞—」、『純真紀要』21:45-57
- 木部暢子(1981.5)「助動詞のアクセントと文法的性格 —北九州方言を例として—」、『日本方言研究会
第32回研究発表会発表原稿集』:10-18
- 木部暢子(1982.9)「連接する助詞のアクセントについて」、『文献探求』10:63-72
- 木部暢子(1983.3)「助詞のアクセントについて(国語学会研究発表会発表要旨)」、『国語学』132:85-86
- 木部暢子(1983.7)「用言の活用形とアクセント」、『文献探求』12:73-64
- 木部暢子(1983.9)「付属語のアクセントについて」、『国語学』134:23-42
- 木部暢子(1989.5)「鹿児島二型アクセントにおける助詞・助動詞のアクセント」、『奥村三雄教授退官
記念国語学論叢』桜楓社:左1-16 =木部暢子(2000.2)『西南部九州二型アクセント
の研究』38-51に収録
- 木部暢子(2009.1)「書評: 田中宣廣著『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』」、『日本
語の研究』5/1:66-73
- 工藤真由美(2005.2)「体験の過去をめぐって —宮城県登米郡中田町方言の述語構造—」、『阪大日本語
研究』17:1-25
- 工藤真由美(2006.11)「アスペクト・テンス」, 小林隆(編)『シリーズ方言学2 方言の文法』岩波書店
:93-136
- 齋藤孝滋(1990.12)「岩手方言における語中子音有声化現象 —音環境・語彙的事情・世代の観点から
—」、『国語学研究』30:120-107
- 佐藤里美(2007.7)「宮城県中田方言の過去形」、『国文学解釈と鑑賞』72/7:113-118
- 佐藤 奏(2008.3)「宮城県登米市石越町方言のアクセント —「南奥特殊アクセント」の分析—」、『日
本語学論集』4:154-143
- 田中宣廣(2005.10)『付属語アクセントからみた日本語アクセントの構造』おうふう
- 中山昌久(1981.3)「動詞活用の種類とその記述方法」、『国語と国文学』58/3:60-78
- 中山昌久(1982.1)「動詞の語形特徴」、『学苑』505:264-247
- 中山昌久(1984.1)「強式について」、『国語と国文学』61/1:41-58
- 中山昌久(1986.8)「微分としての古典文法」、『国文学解釈と鑑賞』51/8:107-122
- 中山昌久(1988.2)「活用形・v'・1」、『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』39:65-76
- 中山昌久(1992.2)「活用形・v'・2」、『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』43:169-191

- 中山昌久(1994.2)「活用形・v'・3」,『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』45:41-50
- 中山昌久(1995.2)「活用形・v'・4」,『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』46:45-72
- 中山昌久(1999.2)「活用形・v'・5」,『東京学芸大学紀要 第2部門 人文科学』50:221-254
- 新田哲夫(1994.9)「鶴岡方言のアクセント」,国立国語研究所(1994.9):81-140
- 服部四郎(1973.6)「アクセント素とは何か? そしてその弁別的特徴とは? 一日本語の“高さアクセント”は単語アクセントの一種であって,“調素”の単なる連続にあらず一」,『言語の科学』4:1-61
- 早田輝洋(1965.4)「動詞・形容詞などの活用とアクセント」,『文研月報』15/4:30-39,73,付表1-3
- 早田輝洋(1999.2)『音調のタイポロジー』大修館書店
- 八亀裕美・佐藤里美・工藤真由美(2005.1)「宮城県登米郡中田町方言の述語のパラダイム 一方言のスペクト・テンス・ムード体系記述の試み一」,『日本語の研究』1/1:51-63
- 屋名池誠(1986.10)「述部構造 一現代東京方言述部の形態=構文論的記述一」,松村明教授古稀記念会(編)『松村明教授古稀記念国語研究論集』明治書院:583-601
- 屋名池誠(1987.1)「活用 一現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]一」,『学苑』565:208-194
- 屋名池誠(1987.9)「述部のアクセント 一現代東京方言述部の形態=構文論的記述[3]一」,『学苑』573:106-91
- 屋名池誠(1988.1)「語 一現代東京方言述部の形態=構文論的記述[4]一」,『学苑』577:209-199
- 屋名池誠(1988.2)「述部のアクセント・第2 一現代日本語方言による記述方法の検証と拡張一」,『学苑』578:110-97
- 屋名池誠(1988.3)「活用・再論 一現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]・補遺一」,『学苑』579:91-79
- 屋名池誠(1988.9)「活用論 一現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]・補遺2— (1)諸説便覧」,『学苑』585:96-86
- 屋名池誠(1988.11)「活用論 一現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]・補遺2— (2)諸説の批判的検討」,『学苑』588:76-67
- 屋名池誠(1989.2)「活用論 一現代東京方言述部の形態=構文論的記述[2]・補遺2— (3)諸説の批判的検討(承前)」,『学苑』591:98-87
- 屋名池誠(1992.6)「上方ことばのアクセント」,大阪女子大学国文学研究室(編)『上方文庫13 上方の文化 上方ことばの今昔』和泉書院:1-59
- 屋名池誠(1998.2)「教詞のアクセント 一現代東京方言のばあい一」,東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集編集委員会(編)『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院:1234-1214
- 屋名池誠(2004.8)「平安時代京都方言のアクセント活用」,『音声研究』8/2:46-57
- 屋名池誠(2005.10)「活用の捉え方」活用とアクセント」,社団法人日本語教育学会(編)『新版日本語教育事典』大修館書店:71-80

和田 実(1969.12)「辞のアクセント」、『国語研究』29:1-20 =徳川宗賢(編)(1980.2)『論集日本語研究2 アクセント』有精堂出版:145-159に収録

和田 実(1971.10)「日本語辞書のアクセント記号」, 金田一博士米寿記念論集編集委員会(編)『金田一博士米寿記念論集』三省堂:529-565

和田 実(1984.2)「辞のアクセントの記号化」, 金田一春彦博士古稀記念論文集編集委員会(編)『金田一春彦博士古稀記念論文集 第2巻 言語学編』三省堂:454-434

(さとう そう 大学院人文社会系研究科 修士課程2年)